

佐賀大学全学教育機構紀要

第 13 号

2025

Henry James の“Louisa Pallant”：語りの技法とその周辺……………名本 達也	1
高校生の地域移動は人口変動にどこまで従うのか — 自県・三大都市圏への進学・就職移動の変化—……………村山 詩帆	11
2024年度の佐賀大学英語副専攻コースの現状と課題……………ヴァンドゥーセン ブレンダン	25
談義本に見られるオノマトペ — 『当世下手談義』『根南志具佐』『風流志道軒伝』を含む七作品を対象に— ……………中里 理子	35

Henry James の“Louisa Pallant”：語りの技法とその周辺

名本 達也

Henry James's Narrative Technique in “Louisa Pallant”

Tatsuya NAMOTO

要 旨

“Louisa Pallant”は、Henry James の『New York 版』に収録されている作品群の中で、最も等閑視されてきた短編小説の一つと言ってよいだろう。この短編について、多田と Tintner は全く正反対の読みを試みているが、これは“Louisa Pallant”が多様な解釈を許す作品であるからではなく、読者が物語の全貌を理解するために必要な情報が、作中で十分に提供されていないことに起因しているように見受けられる。もともと James は、全てを描いて見せる小説家ではなかったし、それが彼の実践してきたリアリズムでもあった。それだけに、この短編が『New York 版』に掲載されているという事実を鑑みれば、James 自身にとっては、作品の出来栄に得心のゆくものであったということの意味しており、初期の頃から、読者が期待するものと、小説家が追求していたリアリズムのあり方とかなり乖離があったという点を指摘するものである。

【キーワード】 Henry James、“Louisa Pallant”、語り手

序

Henry James の“Louisa Pallant”は、最初は、1888年に *Harper's New Monthly Magazine* に掲載され、後には、James 文学の決定版である『New York 版』の第13巻にも収録された短編小説である。しかしながら、『New York 版』に掲載されている一方、小説家の数ある作品の中で、最も等閑視されてきた作品の一つと言っても過言ではないだろう。“Louisa Pallant”は、James が好んで扱った、ヨーロッパに滞在しているアメリカ娘に光をあてることによって欧米の文化的差異を浮き彫りにしようと試みた、いわゆる「国際状況」を主題としているように見受けられる。しかしながら、もともと数の少ない研究資料の中にも、この観点から解釈を試みたものはほとんど見当たらない。

諸研究家がこの作品に対して関心を示してこなかったことについては、結論から言ってしまうと、“Louisa Pallant”が、語りの技法における失敗とまでは言えないにしても、成功とは呼ぶには程遠い仕上がりであることから、作家の意図が読み手に十分伝わらなかったのでは

ないかと推測される。先に指摘した通り、この短編小説は、“Daisy Miller”や *The Portrait of a Lady* に代表される小説家が得意とする「国際状況」というテーマに素材を求めたにも拘わらず不人気であることは、これまでの批評史が証明している。そこで、本稿では、“Louisa Pallant”における語りの技法と、なぜ不評を被るに至ったのかを検証してみたい。

I

“Louisa Pallant”が出版された1888年は、信頼できない語り手 (unreliable narrator) を視点人物に起用したことで知られる中編の秀作“The Aspern Papers”が世に出た年でもあり、James が語りの技法に拘っていた時期であることが窺える。まず、“Louisa Pallant”における語りの問題点を確認しておこう。かつて、語り手「私」は表題の女性 Louisa Pallant と交際していたが、彼女が「贅沢なくらし (“flesh-pots”）」(498) を期待して別の男性へ走って、2人の関係が破局したという苦い経験を持つ。「私」は彼女を既に許したと主張するのだが、作中では、語り手が、まだ Louisa への未練を引きずっていると思われるところが見え隠れする。過去において、ある女性に冷たくあしらわれた男性を視点人物に据えて、その当該女性を描くという点では、同じく1888年に *The Century Magazine* に掲載された“The Liar”とほぼ同じ設定である。また、James は、1868年には、物語の筋立てから構成まで非常に“The Liar”に似ている短編“The Story of a Masterpiece”を書いており、創作活動の早い時期から、物語世界内の語り手 (intradiegetic narrator)、しかも描く対象としての中心人物と深くかつ密接な利害関係にある語り手の視点から物語を進めるという設定を好んで多用していたことがわかる。

“The Aspern Papers”と“The Liar”に登場する視点人物の「私」は、それぞれ私的な目的を抱いて物語の展開に関わり、そのことに対して語り手自身が疚しさや良心の呵責を覚えているため、読者に誠実かつ正確に事実を伝えることができないという歪みが生じており、このことが作品を一層複雑に、そして興味深いものになっている。具体的には、“The Aspern Papers”の語り手「私」は、彼の崇拜する詩人 Jeffrey Aspern がかつて恋人に宛てた書簡を、如何なる手段に訴えてでも手に入れようという妄執に囚われている。“The Liar”の視点人物は、過去に彼を裏切った女性が、今は法螺吹きとして知られる大佐と結婚していることを知り、卓抜した芸術家としての才能を発揮して、彼女の夫を嘘つきとして描くことで恋の痛手の復讐を遂げようと試みる。¹ これら2人の語り手と比較すると、“Louisa Pallant”の語り手は、物足りないくらいに単純かもしれない。“The Aspern Papers”と“The Liar”の語り手とは異なり、この短編小説の視点人物は、作中で良心が咎めるような行動を起こすわけでもなければ、読者に隠し立てしなければならない特別な秘密を持っているわけでもないのである。

Tintner は、“Louisa Pallant”の語り手を“the gullible narrator”と評し、彼は、自分の語っている話の意味を理解できていないと言う。² 視点人物「私」が、Louisa との過去の関係は完全に清算されて、現在彼の心に一切わだかまりはないと彼が主張する時、読者は、それが

事実であるかどうかを判断する必要がある。確かに、話の中で起こった出来事は正確に読者に伝えているが、彼が推測した部分については、Louisa に対する個人的な感情からか、あるいは、Tintner の指摘する彼自身の騙されやすさや理解力不足ゆえからか、彼女の本心を的確に読めていないところがある。Tintner に言わせれば、“Louisa Pallant”の語り手は、自身の周りで起きている出来事を的確に捉えて読者に伝える能力がないということになるわけだが、果たしてこれが James の狙った語りの効果であるのかどうかという点についても考えてみる必要があるだろう。

II

それでは、前章で概観した“Louisa Pallant”の語り手の人物像や、彼の置かれている状況を踏まえた上で、この短編小説がどのように解釈されるのかを考察してゆくことにしよう。“Louisa Pallant”は、“Never say you know the last word about any human heart!” (James 495) という書き出しで始まる。そして、この警句的な一文の意味合いも、作品の解釈次第で大きく変わることになる。

“Louisa Pallant”のおおまかな筋書きは、以下の通りだ。娘 Linda を連れてヨーロッパを漫遊している Louisa に再会した「私」は、彼女たちに甥 Archie Parker を紹介することになるが、Linda と Archie が暫く順調に付き合っているかに見えていたにも拘わらず、突然 Louisa が娘は貪欲で卑劣なので、彼を救済するためにも 2 人を別れさせようと言って、去ってゆくと言うものだ。このような話の展開の仕方では、いわば空騒ぎにしか見えず、表面的には何も起こらなかった物語のようにさえ見受けられる。この一連の出来事から何を読み取るかによって、“Louisa Pallant”という作品の理解は、全く違ったものになる。もともとそれほど議論されて来なかった短編であるため、これまでに提起されてきた解釈に多様性はほとんどないと言ってよいが、以下に全く正反対の読みを 2 つ紹介しておこう。

最も単純明快な読みは多田の解釈で、Louisa が娘 Linda と Archie の交際をやめさせたのは、彼女がかつて語り手を裏切って、より裕福な男性と結婚したことから生じた後悔の念によるという。多田の解釈は以下の通りである。

その青年がかつて彼女が金銭結婚に走って振り捨てた「私」の甥であることが関係して、過去の罪を償いたいという意識も働いているが、彼女が何より「自分のために」と言っているのが注目される。この作品の終わり近くで、「(あの時) 貴方を振り捨てていなかったら、どうしてこのようなことができたでしょうか？」と彼女はふともらすが、それは彼女の魂の奥底から迸り出た叫びと解釈されるし、またこの作品の主題を端的に集約した言葉と受取っていいだろう。そしてこの作品が単なる喜劇というよりも深刻なモラルを扱った作品と見做されるのである。ひどい女と決め込んでいた人の口からこのような言葉を聞けば、「私」が「どんな人の心に関しても究極のこ

とを知っているなどとうそぶくべきではない」と述懐するのも当然であると理解されるのである。(多田 305)

この解釈は、見たところ最も素直な読み方に思われるのだが、同様に、最も単純で素朴な疑問に対して説明できない部分がある。表面的には順調に交際しているように見受けられた Linda と Archie を、Louisa は、後者を救済するためだと言って強引に別れさせる。彼女によれば、その理由というのは Linda が「野心家で、贅沢で、欲しいものは何でも手に入れようとして、私が知っている誰よりも金儲けに余念がない (“ambitious, luxurious, determined to have what she wants—more ‘on the make’ than anyone I’ve ever seen.”) (531)」女性だからだと言う。さらに彼女は、“To climb up to the top and be splendid and envied there, . . . to do that at any cost or by any meanness and cruelty is the only thing she has a heart for. She’d lie for it, she’d steal for it, she’d kill for it.” (534) と続ける。しかしながら、Gary が指摘する通り³、Louisa の主張は矛盾を孕んでいる。彼女の言葉を額面通りに受け取ったとして、Linda が打算的で酷薄な女性であるとするならば、その1年後に、親の財産を相続した富裕な若者 Gimingham 氏と結婚する際に、彼女が、Archie の場合と同様に彼を救済するために、娘との結婚に反対しなかったことについて説明がつかなくなる。

そもそも、Louisa の行動は最初から怪しいのである。語り手が Homburg で久しぶりに Louisa と再会した時、彼女は、既に夫 Henry Pallant と死別しており、語り手は、Louisa が経済的に窮しているという印象を受ける。そして、彼女は、最初のうちは、語り手に気づかないふりをしていたが、「私」が甥の Archie と合流する予定であることを知ると、彼について子細なところまで探り出そうとして「私」に質問を浴びせてくる。この Louisa の魂胆については、語り手が的確に見抜いていて、以下の一節が示す通り、ほぼ曖昧さを感じることなく読者は事実を知ることができる。

Mrs. Pallant immediately guessed that his mother was my sister Charlotte, whom she spoke of familiarly, though I knew she had scarce seen her. Then in a moment it came to her which of the Parkers Charlotte had married; she remembered the family perfectly from the old New York days—“that disgustingly rich set.” (502)

要するに、Louisa は、Archie が如何ほどの財産を所有しているのかを確認して、そして、その金額が彼女を満足させるものであれば、娘 Linda を結婚させてしまおうと目論んだと考えるのが自然であろう。実際に、彼女は露骨な表現で、Archie の財産の総額が幾らになるかを語り手に尋ねている。⁴ こう考える時、果たして、Linda が彼女の母親の言う通り、金のことしか考えていない非情な女性であるかどうかについては、疑わしくなってくる。つまり、Linda はごく普通の女性であるかもしれないのだが、Archie の財産に失望した母親が、娘

の交際に介入して別れさせた다고考える方が、筋が通っているように思われる。

James の作品においてはしばしばあることだが、Linda の人物描写については、実はそれほど多くの情報が与えられていないと言ってよい。語り手の視野に入っては来るものの、彼女の人物像を決定づけるに至る印象的なやり取りや行動も特に描写されることはない。「私」が彼女の人物像について判断を下しているのは、“in the first Linda struck me as perfectly innocent”(509) の一文くらいではないだろうか。つまり、Linda が、金銭欲が強く、身勝手な女だという主張は、彼女の母親 Louisa の言葉の信憑性が、読者に与えられている唯一の判断基準ということになる。Archie も、ほとんど Linda の性格について語るわけではないため、読者は、「私」を信じるか、Louisa の言葉を信じるかの二者択一を迫られることになる。

III

多田の読みとは全く正反対の解釈を試みるのが、Tintner である。多田のアプローチでは説明しきれない部分を解説する過程で、既に Tintner の解釈については紹介してしまったようなものだが、それはおおよそ以下のようなものである。Tintner の主張は、「私」を捨ててより裕福な Pallant 氏との結婚を選択した Louisa の性格は、時を経ても変化していないという立場に立脚している。そして、Louisa は、Archie が将来的に相続する財産が、彼女の満足のゆく金額に達していなかったことを確認するやいなや、娘との間に強引に介入して、2人の交際をやめさせたというものだ。娘をよりよい条件の相手と結婚させるためには手段を選ばない Louisa の価値観や倫理は、いわば女性版 Gilbert Osmond と言えるだろう。

さらに穿った見方をするならば、実は、Archie と Linda が親しくなり始めた直後に、Gimingham 氏との接点ができただけのため、より裕福な娘の結婚相手に乗り換えるために、Archie と Linda の関係を引き裂いたとも考えられる。その可能性は、以下に引用する「私」と Louisa の会話に暗示されている。

I [Louisa] don't know what she [Linda] knows. She has depths and depths, and all of them bad. Besides, I don't hate her in the least; I just pity her for what I've made of her. But I still pity more the man who may find himself married to her.

“There's not much danger of there being any such person,” I wailed, “at the rate you go on.”

“I beg your pardon—there's a perfect possibility,” said my companion. “She'll marry—she'll marry 'well.' She'll marry a title as well as a fortune.”

“It's a pity my nephew has n't a title,” I attempted the grimace of suggesting.
(535-36)

Gimingham 氏が貴族の称号こそ持っていないにしても、Louisa の野心を証明する一節と言えるだろう。上記のようなやり取りがあった後、「私」は以下のような思索にふける。

Queer ideas came into my head. Was the comedy on *her* [Louisa] side and not on the girl's, and was she posturing as a magnanimous woman at poor Linda's expense? Was she determined, in spite of the young lady's preference, to keep her daughter for a grander personage than a young American whose dollars were not numerous enough—numerous as they were—to make up for his want of high relationships, and had she invented at once the boldest and the subtlest of games in order to keep the case in her hands? If she was prepared really to address herself to Archie she would have to go very far to overcome the mistrust he would be sure to feel at a proceeding superficially so sinister? (536-37)

Tintner の読みに従えば、Archie と別れて一年後に、Linda が Gimingham 氏と結婚することについて Louisa が反対しなかったことを容易に説明することができるのである。

このように考える時、当然のことながら冒頭の“Never say you know the last word about any human heart!”という警句も、多田とは全く正反対の結論にたどり着く。多田の解釈では、Louisa が、かつて、よりよい条件を求めて「私」を捨てたことについて謝罪をしたのは、本心から詫びたものだと受け止めることになる。一方、Tintner の解釈に従えば、「私」は、過去に自分が都合よく捨てられたのだが、得心のゆくほどの金持ちと結婚できなかった Louisa は、自分の野心のために、再度 Linda と Archie を引き離して、より条件のよい結婚を娘のためにお膳立てしたことになる。また、「私」は、Louisa から過去に受けた心の痛手については、自分の心の中では清算できたと再三にわたって述懐するが、Tintner は、“her mother's charm, once so operative on him, still works after many years. He is still her easy victim” (72) と述べて、未だに彼女に未練があり、故に Louisa の本心を見抜くことができず、彼女に翻弄されっぱなしの語り手であるということになる。それだけに、“Never say you know . . .”の一文が「私」の口からでた言葉であることは、全体像を理解できた読者からすれば、痛烈なアイロニーとなる。

Archie と Linda を引き離したのが Louisa であると考えられる根拠をもう一つ挙げるなら、この作品のタイトルに彼女の名前が与えられている点だ。⁵ この単純な事実が示唆する通り、“Louisa Pallant”は、一見 Linda と Archie の恋愛小説であるかのように見えるが、あくまでも主人公は Louisa であり、James がこの短編において描こうと試みたのは、娘の結婚を通して、自分の置かれている経済的かつ社会的状況を好転させようと画策する Louisa の姿なのである。

IV

さて、前章までで、多田と Tintner の対照的な解釈をそれぞれ概観した。前者の解釈によれば、Louisa は心の底から彼女の過去の行動を悔い改めたことになる。Tintner の読みに従えば、語り手は、彼自身が、かつて Louisa の私利私欲から生じた行動に翻弄されただけでなく、今また当時と同じ動機から、彼女が Linda と Archie を引き離したわけだが、「私」はこの事実気づくこさえできない愚かな語り手だということになる。既に述べた通り、Linda が Archie と結婚することについては反対した Louisa が、Gimingham 氏との結婚は受け入れた理由を考えれば、Tintner の解釈を受け入れる以外に彼女の行動の一貫性の欠如を説明することはできないだろう。

それでは、“Louisa Pallant”という短編小説の中のどのような要素が、批評家たちを正反対の結論へと導いてしまうのであろうか。Tintner は、語り手「私」が、過去及び現在においても Louisa に騙されっぱなしであることを問題視するのだが、“Louisa Pallant”の語り手の問題点は、そもそも物語の中で重要な意味を持つ登場人物に関する情報や出来事のうち、客観的に読者に伝えられる情報が皆無に等しいところにある。この表現は、少々極端に響くかもしれないが、以下で順を追って説明してゆくことにしよう。

話をわかりやすくするために、ここでは語りの構造が一見似ているように見受けられる、先に少し触れた“Daisy Miller: A Study”を比較の対象として取り上げてみたい。この James 初期の作品は、Winterbourne という男性の視点を通して語られるが、彼は厳格なカルヴィニズム的教育を受けて育ったため、奔放にふるまう Daisy の行動を的確に理解することができない。しかしながら、少なくともカルヴィニズムがどういうものであるのか、あるいは、19世紀におけるアメリカ娘の行動が、当時のヨーロッパ社交界でどのように批判されていたのかについて、文化・社会・及び歴史的背景を知っていれば、あるいは調べることによって、読者は、ある程度の認識や理解を共有することができる。言い換えれば、Winterbourne によって語られる物語に、どのようなバイアスがかけられているのかについて、読者は共通の認識を持つことが可能であると言うことだ。また、例えば、Winterbourne が Daisy と二人きりでシヨン城を訪れたこと、そして、ある晩、彼女が Giovanelli と Colosseum を訪れているのを彼が目撃したことなどについては、読者はこれらをそのまま事実として受け取ることができるし、この事実が Winterbourne によって歪められて伝えられているという可能性を疑わなければならないということはない。

一方、“Louisa Pallant”においては、状況設定から作中の出来事まで、実は、読者には、ほとんど全ての重要な事項は語り手の印象としてしか伝えられない形を取っている。冒頭で語り手が十数年ぶりに Louisa を見かけた時、最初彼女は気づかないふりをしたというのだが、全知の視点により彼女の心の中を覗き込めるわけではないので、これが事実かどうかはわからない。そして、その直後に、彼女が経済的に貧窮しているという印象を受けたと言うのだが、これも飽くまで視点人物の印象の域を出ない。このように、事実を伝える時に James

は視点人物が得た印象を読者に伝える形で物語を進めるわけだが、ここで問題なのは、“Daisy Miller”の場合と異なり、“Louisa Pallant”においては、果たして伝えられた内容が事実かどうかを客観的に判断する基準が読者に与えられていない点である。このような調子で次々と不確かな情報が積み重ねられた形でこの短編のプロットは構成されている。そして、最も必要とされる情報、すなわち、Linda が実際のところ強欲で利己的な女性であるのかどうかという核心の情報についても、真偽を判断する手がかりを読者に与えることを巧みに避けているのである。

Archie が Linda について述懐する場面も極めて少ないのだが、彼は、語り手に彼女をどう思っているかと問われた時、“she was a regular little flower”(515) と回答している。また、Pallant 母娘が Homburg を引き払った時、Linda に手紙を書き、彼女から返信を受け取ることによって、彼らが Baveno に滞在しているのを突き止めたのも Archie だ。Archie が Linda に抱いている感情については、他にはほとんどといってよいほど描写がないが、Archie の手紙に対して自分たちの居所を直ぐに知らせたことから、Linda と彼の交際が順調に進んでいたであろうことも推測できる。となれば、2人を強引に引き離したのは、疑いの余地なく Louisa だという結論に至るのだが、それでも、このことが Linda が強欲で利己的な女性であるという可能性を否定してくれるわけではない。

ここまでで見てきた議論が、読者がプロットに沿って読み進めた結果得られる情報の限界であろう。これだけの情報をもとに、Linda が強欲な性格の持ち主だと言う Louisa の主張が事実か否かというこの短編の核心の部分にたどり着くことは不可能なのである。言い換えるなら、Louisa が娘のよりよい縁談を求めて Linda と Archie の仲を裂いたという Tintner の解釈にたどり着くためには、論理を飛び越えた直感やひらめきが必要だと言うことだ。そして、その仮定をプロットに当てはめて検証すると、それが最適解だとわかる仕組みになっているのが“Louisa Pallant”なのである。

結び

もともと James は、物語の全貌を全て描いて読者に提示してくれる作家ではなかった。彼は、精緻な心理描写で知られる一方、中期後半以降からは劇的手法を多用し、作中人物の心の中を覗きこむ機会を読者に与えなくなった。しかしながら、“Louisa Pallant”ほど読者の視野を制限してしまい、物語の全貌を見えにくくしてしまっている作品が、1888年と言う早い時期に世に出されていたことは特筆に値するだろう。

本稿で論じてきた通り、この短編小説は、論理的に読んで事実を積み上げて行き、小説家が意図した結論に辿り着くには、読者に与えられる情報が少々不足し過ぎている印象を受ける。確かに、現実の世界では、ある事象について全てを知るということは不可能である。物語の全容を把握するためには一定以上の情報が供給される必要があるわけだが、James の作品においては、それらが十分に与えられない場合の方が多い。その結果、読者は情報の不足

から生じた空白を埋めるために少々飛躍した推測を常に求められ、適切な推測ができなければ物語の全容を把握することさえ困難になる。これこそが James が初期の頃から追求し始めた彼独自のリアリズムであり、同時に彼の作品の難解さを構成する一つの要素と言えるだろう。

註

1. “The Aspern Papers”と“The Liar”の語り手の作中における各々の目的の詳細については、拙論「“The Aspern Papers”—語り手をめぐって—」及び「Henry James の“The Story of a Masterpiece”と“The Liar”：肖像画と嘘の効果」を参照。
2. “the gullible narrator” who does not understand the meaning of the story he is telling. (Tintner 69)
3. “And if Mrs. Pallant considers her daughter so predatory, why does she not prevent this Englishman, Mr. Gimingham, from marrying Linda, saving him as she has allegedly saved young Archie? (Gary S34).
*引用の頁番号の前に“S”を付しているのは、出典原文のまま。
4. She even asked me the sort of “figure” his fortune might really amount to, and professed a rage of envy when I told her what I supposed it to be. (508)
5. “Daisy Miller”や *Roderick Hudson* を始めとして、James 初期の作品の中で、とりわけその表題に主人公の名前が与えられている作品にあつては、その主題が何であれ、主題それ自体は表題の人物にまつわる問題や事象になっている場合が大半を占めていると言ってよいだろう。その表題に具体的な登場人物の名前が与えられているわけではないが、“The Patagonia”(1888)も表題の付け方としては、同趣旨の好例と言える。英国へ向かう Patagonia 号に乗船している社交界の面々は詮索好きで、偶然その標的となってしまった Miss Grace は、あることないこと噂され、船から身投げすることになる。この場合、James が非難を込めて描こうとしているのは、彼女を悲劇的な自殺へと追い込んだゴシップ好きの有閑階級の人々であり、それ故に、乗船客全員を指して、タイトルに船名が与えられていると考えられる。しかしながら、中短編だけで百十数編を超える James の作品群の中には、もちろん例外もある。こちらも例を挙げておくと、中期の短編“Sir Edmund Orme”では、James が描く中心となる対象は、もちろん Mrs. Marden であり、既に亡くなっている Edmund の幽霊が主人公ではない。当然のことながら、この短編は、彼女の若き日に犯した過ちに対する良心の呵責の物語であり、Sir Edmund Orme の復讐劇であると解釈することには無理があるだろう。

Works Consulted

Gray, Larry A. “The Mother as Artist in ‘Louisa Pallant’: Re-casting International Scene.”

Henry James’s Europe. Ed. Dennis Tredy, et al. Cambridge: Open Book, 2011.

S29-37. <<https://www.academia.edu/55843873/>

James’s Romantic Promises *The Golden Bowl* and the Virtual>.

James, Henry. "Louisa Pallant." Vol. 13 of *The Novels and Tales of Henry James*. 24 vols.

New York: Scribner's, 1936. 493-550.

Tintner, Adeline R. "The Use of Stupidity as a Narrative Device: The Gullible Teller in James's 'Louisa Pallant.'" *The Journal of Narrative Technique*. 15.1 (1985): 69-74.

Nicoloff, Philip L. "At the Bottom of All Things in Henry James's 'Louisa Pallant.'" *Studies in Short Fiction*. 7 (1970): 409-20.

多田敏夫訳『ヘンリー・ジェイムズ「ロンドン生活」他』英潮社 1995年.

名本達也 「"The Aspern Papers"一語り手をめぐって―」『佐賀大学英文学研究』20号 1992年
31-47頁

―――「Henry James の"The Story of a Masterpiece"と"The Liar"：肖像画と嘘の効果」
『九州アメリカ文学』43号 2002年 35-44頁

高校生の地域移動は人口変動にどこまで従うのか — 自県・三大都市圏への進学・就職移動の変化 —

村山 詩帆

Education and Geographical Mobility in Postwar Japan:
A New Direction between National and Local Trends

Shiho MURAYAMA

要 旨

高校卒業後における進路分化の変容過程について、地域移動の有無に注目しながら、18歳人口の変動が進学と就職におよぼす影響関係を時系列的に比較するための実証的な検討を試みた。その結果、(1)自県進学率は18歳人口減を機に上昇し、自県就職率は2000年代まで減少し続ける、(2)三大都市圏進学率も18歳人口減で上昇し、収容力のマージンは地元外からの進学をも促進する、(3)自県・三大都市圏就職率はいずれも減少傾向にあり、有効求人倍率より18歳人口に依存する、(4)都道府県の自県進学率に対し、18歳人口は三大都市圏進学率や自県・三大都市圏就職率より大きな説明力を示す、(5)18歳人口と自県進学率の関係性に最大の構造変化が表れる時期は、18歳人口が少ない県で早く、それ以外の多くは全国の18歳人口のピーク前後にある、などの知見が得られた。

【キーワード】 収容力、地域移動、地元志向、ジェンダー

1. 序 論：社会的な格差をめぐる争点

地方大学の存在意義が取り沙汰される中、地元の大学に進学する高校生の割合は増加する傾向にある。地元大学への進学が教育機会の収容力と密接な関係にあることから、地元進学の高まりは、18歳人口の減少によって収容力のマージンが増大した結果であると考えられる(上山 2012, 12-13頁)。高校卒業後の進路として進学を選ぶ理由が、教育を目的達成の道具的な手段とする「機能的な価値」や、地位を表示するシンボルとする「象徴的な価値」(Havighurst 訳書1963, 115-116頁)に動機づけられたものである場合、地元進学の高まりも教育投資の機会を高校生が選択的に享受しようとした結果とみなすことができる。

大学進学率の上昇については、求人倍率や初任給などの外生的な経済変数より、自県や大都市圏の収容力といった内生的なシステム要因によって、時系列的な変化の殆どが説明される(潮木 2006, 18-19頁)。地元進学の高まりが戦後の日本社会における大学進学率の上昇や学歴主義の浸透を背景としていることは疑いない。だが、進学か就職かを問わず、地元を選ぶか地元から移動するのかは、教育機会や労働市場の収容力からやはり何らかの制約を受

けるはずである。

高校卒業後の進路分化にとって収容力が重要な説明変数ではあったとしても、18歳人口の変動が教育機会の収容力にマージンの増大をもたらしている可能性があり、労働市場の収容力に対しても一定の影響関係が成り立つことが予想される。入学金や授業料などの機会費用や教育機会の選別性、求人倍率や初任給もまた、収容力を量的のみならず質的にも構成し、進学するか就職するか、地域移動するかしないかの進路決定に影響をおよぼしうる¹⁾。しかしながら、18歳人口減による収容力のマージン増大が地元進学を顕在化させるのだとすれば、高校生の中で地元志向は以前から広く共有され、収容力の質を構成する要素として相対的に重要な地位を占めていた可能性も否定できない。

高度経済成長下でさえ、労務コスト抑制のため出身地など社会的属性による排除があり、中学校では就職指導より進学指導に熱心であったとされる（加瀬 1997, 100-113頁）。地域移動の制約と進学シフトを強める学校教育の間にあって、収容力が進路分化を強く規定するシステム要因である場合、就職から進学へ指導の重心が移行する過程は、地元志向に依拠した進路選択の自由度と無関係ではなくなる。本稿の目的は、高校卒業後の進路分化における地域移動の有無に注目し、18歳人口の変動が進学と就職におよぼす影響関係を時系列的に比較する作業を通して、高校生の進路分化に生じた諸変化を実証的に検討することにある。

2. 分析の方法

18歳人口のピークに近づくほど収容力のマージンは縮小し、ピークを越えることで拡大に転じるとの仮定すれば、人口変動と自県進学率の関係には18歳人口のピーク付近で構造変化が生じることが予想される。ただし、進学と就職とでは収容力をなす教育機会と労働市場を形成する制度的な枠組みが異なるため、影響関係の方向性や強弱、構造変化が最も顕在化する時点を特定化し、異同を比較することで進路選択の特徴を析出する必要がある。

2.1 予測とモデル

自県内での進学と就職、大都市圏への進学と就職は、異なる戦略にもとづく進路選択を反映した結果であると考えられる。大都市圏への就職移動による高い収入への期待が高卒就職のメリットとして認識される可能性（朴澤 2016, 231頁）を考慮すれば、大都市圏への進学移動もまた、自県内にある大学への進学や就職を選択する高校生より学歴のメリットを認識している可能性がある。高校卒業後の進路分化を、進学と就職、自県内と大都市圏への移動の2つの軸から比較することが学術的に重要となる。また、教育機会の収容力が18歳人口に強く規定されるのに対し、労働市場の収容力は景気動向とも密接に関連すると考えられることから、それらが高校卒業後の地域移動を含めた進路分化といかなる関係にあるのかを時系列的に検討することにより、変化のメカニズムを特徴づける知見が析出されるものと期待される。

こうしたアプローチを戦略的に採用しつつ、自県への進学率と就職率、(産業の集積が顕著な)三大都市圏²⁾への進学率と就職率を目的変数とし、18歳人口(3年前の中学校卒業者)、景気動向や労働市場の収容力の指標としての有効求人倍率を説明変数とした回帰推定を行う。高校卒業後の進路分化における変化の趨勢を確認した後、目的変数として投入する時期区分ダミーの分割点を一年ずつ変えながら回帰推定を反復し、構造変化のChow検定に用いる F 統計量が最大の値となる時期がいずれの年度にあるのかを具体的に特定化していく。

2.2 データセット

本稿の分析に用いるデータベースは、文部科学省『学校基本調査』(学校調査、卒業後の状況調査)および厚生労働省『職業安定業務統計』の有効求人倍率のうち、1962年度から2023年度の統計表を年度または都道府県の単位で結合したものである。このデータベースを用いて作成できる変数は毎年度の統計表があるものに限定されるが、都道府県別に集計された統計表が含まれ、自県進学率と自県就職率、三大都市圏進学率と三大都市圏就職率、18歳人口(3年前の中学校卒業者数)、有効求人倍率を都道府県の単位で作成している。

3. 高校卒業後の進路分化における地域性

本節では、第一に、高校卒業後の進路分化における進学移動と就職移動の趨勢から、地域差やジェンダー差の拡大または縮小を確認し、18歳人口、有効求人倍率を説明変数とした回帰モデルにより、説明力や影響力の方向性、構造変化について全国的な傾向性を推定する。第二に、都道府県の単位で同様の回帰推定を行い、全国的な変数間の関連から観察される傾向性との異同を比較する作業を通して、都道府県間にある進路分化の個別的な特徴を明らかにする。

3.1 進学・就職をめぐる地域移動の趨勢

18歳人口および男女別の自県進学率と自県就職率(大学・短期大学)の推移を、図1aに示す。自県進学率(大学)は18歳人口が減少に転じた1993年度を機に上昇しているのに対し、自県進学率(短期大学)は減少している。自県就職率についても、2000年代に入るまでは一貫して減少し続けているが、2000年代付近から再び拡大に転じている。ジェンダー差に注目すると、自県進学率(大学)は男が女を上回っていたが、18歳人口の減少期に入って以降、ジェンダー差を縮小させ、近年では殆ど差が目立たない。自県就職率は女の割合が大きかったのが、18歳人口の減少期に入るまでジェンダー差は縮小に向かい、1995年度からは男女の差が反転し、差の開きも大きくなっている。

三大都市圏への進学・就職率の推移については、図1bに示す通りである。18歳人口が減少期に入ると同時に、大学の三大都市圏進学率が上昇し、やや遅れて短期大学で減少に転じている。ジェンダー差は、大学への進学では男が女を上回り、短期大学への進学になると女

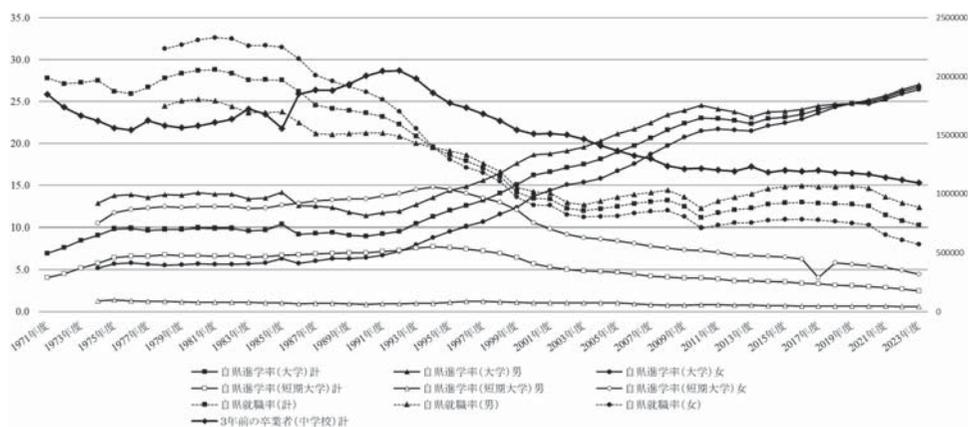


図1a 自県進学・就職率および18歳人口の推移

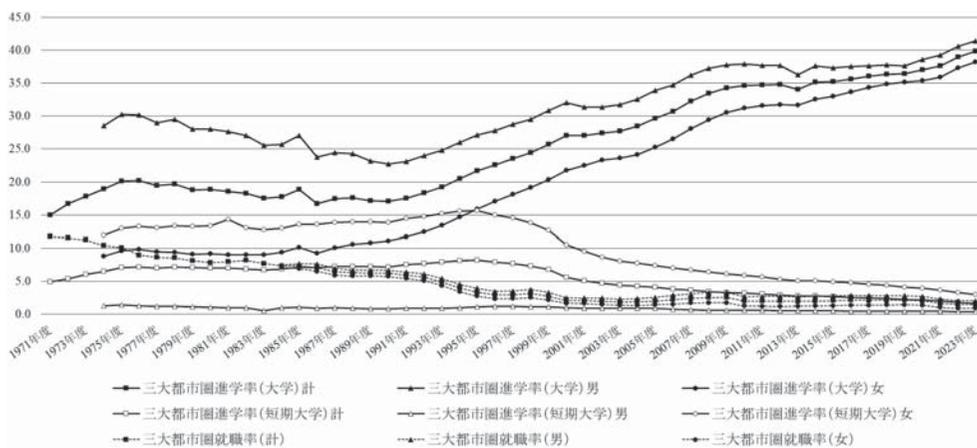


図1b 三大都市圏進学・就職率の推移

が男を上回る傾向が顕著であるが、いずれの差も概ね縮小傾向にある。就職では男女差があまり目立たない。

なお、自県進学率（大学）および三大都市圏進学率（大学）には、図2に示す通り、概ね人口規模に対応した地域間格差があるものの、低成長期における地域移動減（佐藤 2004, 206, 239頁）は三大都市圏への進学移動に当てはまらず、むしろ地域移動を促進している。政令指定都市を含む道県の三大都市圏進学率は、それ以外の県を下回っているが、旧制帝大や広島大学など、選別性の高い国立大学が設置されている同県が含まれるせいかもしれない³⁾。就職率の地域間格差に関しては、自県か三大都市圏かを問わず、進学率ほど人口規模との対応関係が認められない⁴⁾。

自県や三大都市圏への進学率と就職率が地域間格差を拡大または縮小しているのかを相関比（ r^2 ）によって示すと、図3のようになる。三大都市圏進学率の地域間格差は2016年度まで拡大し、その後は縮小気味である。ジェンダー差も18歳人口のピーク前後を除き、殆ど目

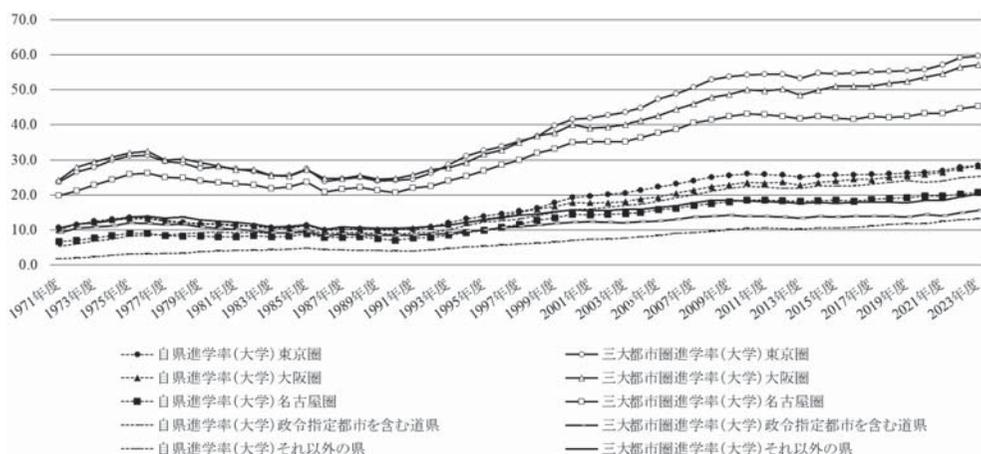


図2 自県進学率および三大都市圏進学率の地域間格差（大学）

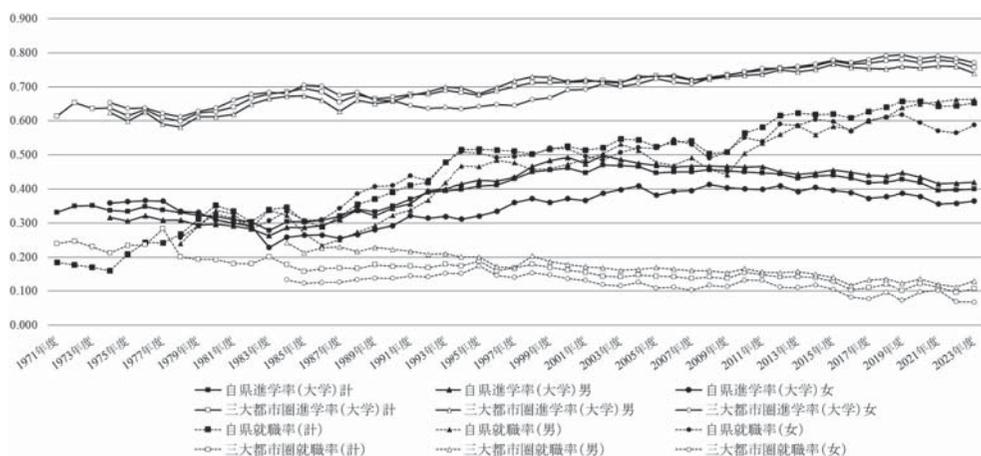


図3 自県進学・就職率および三大都市圏進学率の地域間格差の増減（ η^2 ）

立たない。自県進学率（大学）の η^2 は2000年代初頭まで増大した後、縮小傾向にあり、男子が女子より大きい。自県就職率の η^2 は1990年代に横ばいとなり、2010年代にとりわけ男子で再び増大する傾向を示している。

こうした趨勢が18歳人口の変動によってどのくらい説明できるのか、回帰推定した結果を表1に示す。全期間の R^2 と勾配は、計算可能なすべての年度からなる目的変数に各説明変数を投入した単回帰モデルの決定係数と回帰係数、 $\max F$ のそれは、Chow検定の検定統計量として用いる F 値が最大となる時期区分ダミーを同時投入した重回帰モデルの決定係数と回帰係数、そして年度である⁵⁾。

18歳人口を投入した全期間の R^2 は、男女間でやや違いがあるものの、自県進学率と三大都市圏進学率のいずれのモデルにおいても大きな値を示し、勾配の符号はすべて負となっている。（構造変化の検定統計量である）Chow検定の F 値が最大となるのは、三大都市圏進

表1 回帰推定の結果（大学進学率）

説明変数	自県進学率（大学）					三大都市圏進学率（大学）				
	全期間		max. <i>F</i>		年度	全期間		max. <i>F</i>		年度
	<i>R</i> ²	勾配	<i>R</i> ²	勾配		<i>R</i> ²	勾配	<i>R</i> ²	勾配	
18歳人口	0.83***	-0.00***	0.98***	-0.00	1995	0.85***	-0.00***	0.98***	-0.00**	1994
男	0.88***	-0.00***	0.99***	-0.00***	1995	0.95***	-0.00***	0.98***	-0.00***	1990
女	0.77***	-0.00***	0.98***	0.00*	1995	0.75***	-0.00***	0.98***	0.00**	1994
有効求人倍率	0.08*	5.27*	0.91***	-2.49*	1999	0.07*	6.30*	0.90***	-3.14*	1999
進学率（大学）	0.99***	0.53***	1.00***	0.39***	1999	1.00***	0.65***	1.00***	0.59***	1986
就職率	0.79***	-0.57***	0.95***	-0.33***	2006	0.79***	-0.69***	0.89***	-0.06	1995

†*p*<.10, **p*<.05, ***p*<.01, ****p*<.001

進学率の男を除き、18歳人口の減少期以降の年度を示している。18歳人口とは対照的に、有効求人倍率は自県進学率、三大都市圏進学率のいずれに対しても5%水準未満で統計的に有意差が認められるものの、*R*²の値はごく小さい。勾配の符号は全期間で正であるのに対し、max. *F*のそれは負となっている。max. *F*となる年度も、高度経済成長に陰りが現れる1970年代や、平成景気が後退する1990年代初頭ではない。

回帰モデルの説明力の指標である*R*²が最も大きな値を示すのは、進学率（大学）であり、この傾向は自県進学率、三大都市圏進学率のいずれに対しても変わりが無い。ただし、後者のmax. *F*は18歳人口のピーク前である。また、自県進学率と三大都市圏進学率のいずれも、就職との間に同程度のトレードオフの関係が成り立つが、*R*²の値は18歳人口ほど大きくない。max. *F*となる年度は自県進学率が2000年代、三大都市圏進学率も1990年代後半と、18歳人口のピークからやや遅れている⁶⁾。

表2 回帰推定の結果（就職率）

説明変数	自県就職率					三大都市圏就職率				
	全期間		max. <i>F</i>		年度	全期間		max. <i>F</i>		年度
	<i>R</i> ²	勾配	<i>R</i> ²	勾配		<i>R</i> ²	勾配	<i>R</i> ²	勾配	
18歳人口	0.52***	0.00***	0.95***	-0.00	1990	0.45***	0.00***	0.90***	0.00	1987
男	0.51***	0.00***	0.93***	-0.00***	1994	-	-	-	-	-
女	0.54***	0.00***	0.99***	-0.00***	1993	-	-	-	-	-
有効求人倍率	0.01	-1.69	0.94***	-0.70	1994	0.00	0.29	0.86***	3.78***	1988
進学率（大学）	0.86***	-0.52***	0.95***	-0.01	1988	0.74***	-0.22***	0.91***	-0.47***	1986
就職率	0.99***	0.65***	1.00***	0.53***	1978	0.95***	0.32***	0.99***	0.39***	1977

†*p*<.10, **p*<.05, ***p*<.01, ****p*<.001

自県就職率と三大都市圏就職率について、表1と同様に回帰推定を行った結果を示したものが、表2である。18歳人口を説明変数とする回帰モデルの*R*²は、進学率にくらべて明らかに小さく、自県就職率では男の*R*²を女の*R*²が上回っている。自県進学率の全体と三大都市圏進学率では、max. *F*となる年度はいずれも18歳人口のピーク前となっている。有効求

人倍率も自県進学率や三大都市圏進学率のそれを下回っており、 $\max F$ となる年度の勾配が有意な正の符号を示す三大都市圏進学率も、(構造変化の検定統計量が最大となる)年度は経済成長が後退する時期から乖離がある。進学率(大学)はやはり自県就職率、三大都市圏就職率いずれともトレードオフの関係にあり、最も大きな R^2 の値を示しているのは就職率である。また、 $\max F$ となる年度は、自県就職率、三大都市圏就職率のいずれも高度経済成長が後退する時期にほぼ重なる。

3.2 都道府県レベルの人口変動と景気動向の効果

18歳人口のピークは1992年とされるが、これは全国のピークであって、都道府県ごとに見れば大きな隔りがある。収容力に地域差のみならず時期的な差があるとすれば、教育機会と労働市場の構造と相まって、高校卒業後の地域移動が俄かには理解できない複雑な変化を遂げている可能性が考えられる。人材配分経路を分化させる学歴主義的トラッキングには地域による相対的な遅れがあるとする片瀬・阿部(1997, 172-176頁)や、学歴社会が成立する条件を学歴によって管理されない自営業層の衰退とする野村(2014, 247頁)などの主張は、教育機会と労働市場の構造に地域差があることを示唆するものである⁷⁾。

こうした機会と市場の構造的な地域差が進路分化の地域差や変化をもたらす可能性に配慮し、自県進学率と三大都市圏進学率を18歳人口によって都道府県別に回帰推定した結果を、表3aに示す。都道府県のカッコ内は18歳人口のピーク年度であるが、全国よりも早期から減少傾向にある小規模県が散見され、1992年度付近に18歳人口のピークがあるのは三大都市圏や政令指定都市を含む道県などに偏在している⁸⁾。回帰モデルの R^2 は35都道府県の自県進学率が三大都市圏進学率を上回り、乖離が少なからず目立つ。表1で確認した全国の推定から得られたものとは大きく異なる結果となっている。三大都市圏のうち東京圏や大阪圏には、埼玉、千葉、神奈川、奈良のように、 R^2 の値が極端に小さい県が含まれるが、地域圏によって一定程度セグメント化された教育機会の構造があり、かつ大都市圏ほど地域移動に歪みを生じやすいのかもしれない。勾配の向きは自県進学率と三大都市圏進学率のいずれも全国の傾向にほぼ一致するが、 $\max F$ となる年度の勾配に全国とは符号の向きが異なる県が散見される。 $\max F$ となる年度も、全国では18歳人口のピーク直後だったが、1970年代から2010年代までとレンジが大きい。

自県進学率と三大都市圏進学率を有効求人倍率によって都道府県別に回帰推定した結果を、表3bに示す。18歳人口にくらべると全期間の R^2 は小さな値となっているが、表1で示した全国の回帰推定結果より大きな値が目立ち、自県進学率では30都道府県、三大都市圏進学率でも24道府県が全国の値を上回っている。勾配の符号も全国の傾向とは少なからず異なり、 $\max F$ となる年度も、三大都市圏進学率のレンジが大きい(自県進学率では1996年度から2005年度の9年度であるのに対し、三大都市圏進学率では1980年度から2007年度まで27年度のレンジがある)。

表 3a 都道府県別の18歳人口による回帰推定の結果（大学進学率）

都道府県	自県進学率（大学）				年度	三大都市圏進学率（大学）				年度
	全期間		max. F			全期間		max. F		
	R2	勾配	R2	勾配		R2	勾配	R2	勾配	
北海道 (1991)	0.96***	0.00***	0.99***	-0.00***	1987	0.57***	-0.00***	0.92***	-0.00	1979
青森 (1968)	0.93***	-0.00***	0.96**	-0.00***	1989	0.73***	-0.00***	0.95***	-0.00***	1979
岩手 (1967)	0.91***	-0.00***	0.98***	-0.00***	1998	0.44***	-0.00***	0.82***	-0.00*	1982
宮城 (1968)	0.87***	-0.00***	0.99***	-0.00***	1997	0.73***	-0.00***	0.96***	0.00	1995
秋田 (1968)	0.89***	-0.00***	0.99***	-0.00***	1995	0.32***	-0.00***	0.67***	0.00**	1997
山形 (1966)	0.88***	-0.00***	0.97***	-0.00***	2001	0.40***	-0.00***	0.77***	0.00*	1997
福島 (1966)	0.86***	-0.00***	0.98***	-0.00***	1993	0.67***	-0.00***	0.91***	-0.00	1996
茨城 (1992)	0.66***	-0.00***	0.98***	-0.00***	1991	0.60***	-0.00***	0.99***	-0.00*	1991
栃木 (1966)	0.72***	-0.00***	0.99***	-0.00**	1989	0.73***	-0.00***	0.97***	-0.00***	1993
群馬 (1992)	0.81***	-0.00***	0.98***	-0.00	1998	0.74***	-0.00***	0.95***	-0.00***	1992
埼玉 (1992)	0.03	-0.00	0.99***	0.00***	1994	0.14***	-0.00**	0.95***	-0.00	1998
千葉 (1992)	0.08*	-0.00*	0.99***	0.00*	1994	0.17**	-0.00**	0.94***	-0.00	1997
東京 (1991)	0.84***	-0.00***	0.95***	-0.00***	2008	0.54***	-0.00***	0.98***	0.00***	1990
神奈川 (1992)	0.07†	-0.00†	0.98***	0.00***	1994	0.51***	-0.00***	0.90***	-0.00***	2008
新潟 (1966)	0.89***	-0.00***	0.99***	-0.00***	1992	0.74***	-0.00***	0.89***	-0.00	1996
富山 (1966)	0.74***	-0.00***	0.89***	-0.00***	1989	0.70***	-0.00***	0.77***	-0.00***	1999
石川 (1992)	0.72***	-0.00***	0.90***	0.00	1999	0.57***	-0.00***	0.72***	-0.00***	1992
福井 (1967)	0.89***	-0.00***	0.96***	-0.00**	1991	0.82***	-0.00***	0.91***	-0.00	1992
山梨 (1966)	0.88***	-0.00***	0.97***	-0.00*	1990	0.86***	-0.00***	0.95***	-0.00	1993
長野 (1966)	0.90***	-0.00***	0.98***	-0.00***	2002	0.86***	-0.00***	0.89***	-3.28	1979
岐阜 (1992)	0.71***	-0.00***	0.94***	0.00	1995	0.87***	-0.00***	0.98***	-0.00***	1991
静岡 (1992)	0.81***	-0.00***	0.99***	0.00	1994	0.82***	-0.00***	0.95***	-0.00***	1992
愛知 (1992)	0.45***	-0.00***	0.97***	-0.00***	1995	0.18***	-0.00**	0.81***	-0.00	1993
三重 (1992)	0.62***	-0.00***	0.94***	-0.00	1988	0.77***	-0.00***	0.95***	-0.00***	1991
滋賀 (1993)	0.14***	-0.00**	0.99***	-0.00	1994	0.12***	-0.00*	0.97***	-0.00*	1991
京都 (1991)	0.60***	-0.00***	0.96***	-0.00*	1998	0.60***	-0.00***	0.96***	-0.00***	1991
大阪 (1991)	0.68***	-0.00***	0.92***	-0.00***	1998	0.63***	-0.00***	0.97***	-0.00***	1987
兵庫 (1992)	0.63***	-0.00***	0.99***	0.00	1994	0.86***	-0.00***	0.92***	-0.00***	2013
奈良 (1992)	0.14***	-0.00**	0.96***	-0.00	1991	0.26***	-0.00***	0.98***	-0.00*	1994
和歌山 (1966)	0.80***	-0.00***	0.97***	-0.00***	2019	0.91***	-0.00***	0.95***	-0.00***	1996
鳥取 (1966)	0.82***	-0.00***	0.84***	-0.00†	2001	0.26***	-0.00***	0.73***	-0.00†	1981
島根 (1966)	0.89***	-0.00***	0.95***	-0.00***	2018	0.45***	-0.00***	0.74***	-0.00***	1981
岡山 (1992)	0.77***	-0.00***	0.97***	-0.00†	1990	0.19***	-0.00**	0.55***	-0.00**	1980
広島 (1992)	0.75***	-0.00***	0.98***	-0.00**	1994	0.38***	-0.00***	0.85***	-0.00*	1980
山口 (1967)	0.94***	-0.00***	0.97***	-0.00***	2010	0.01	-0.00	0.56***	-0.00*	1983
徳島 (1966)	0.89***	-0.00***	0.99***	-0.00***	1992	0.28***	-0.00***	0.63***	-0.00***	1981
香川 (1966)	0.80***	-0.00***	0.95***	-0.00***	1983	0.71***	-0.00***	0.78***	-0.00**	1979
愛媛 (1966)	0.94***	-0.00***	0.96***	-0.00***	1986	0.73***	-0.00***	0.87***	-0.00*	1980
高知 (1966)	0.86***	-0.00***	0.94***	-0.00***	2019	0.84***	-0.00***	0.93***	-0.00	1986
福岡 (1967)	0.73***	-0.00***	0.98***	-0.00***	1991	0.80***	-0.00***	0.87***	-0.00	1986
佐賀 (1967)	0.91***	-0.00***	0.96***	-0.00***	1992	0.28***	-0.00***	0.76***	0.00***	1996
長崎 (1967)	0.90***	-0.00***	0.98***	-0.00***	2000	0.44***	-0.00***	0.75***	0.00	1979
熊本 (1967)	0.86***	-0.00***	0.99***	-0.00***	1994	0.36***	-0.00***	0.90***	-0.00	1982
大分 (1967)	0.93***	-0.00***	0.97***	-0.00***	1999	0.00	-0.00	0.28***	-0.00*	1983
宮崎 (1967)	0.88***	-0.00***	0.97***	-0.00***	1991	0.67***	-0.00***	0.86***	0.00	1996
鹿児島 (1967)	0.91***	-0.00***	0.96***	-0.00***	1993	0.23***	-0.00***	0.92***	0.00***	2005
沖縄 (1973)	0.83***	-0.00***	0.97***	-0.00*	1994	0.65***	-0.00***	0.89***	-0.00***	2019

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表3b 都道府県別の有効求人倍率による回帰推定の結果（大学進学率）

都道府県	自県進学率（大学）					三大都市圏進学率（大学）				
	全期間		max. F		年度	全期間		max. F		
	R ²	勾配	R ²	勾配		R ²	勾配	R ²	勾配	
北海道 (1991)	0.32***	19.35***	0.91***	-9.44*	1999	0.52***	7.27***	0.74***	2.55	2007
青森 (1968)	0.65***	11.38***	0.93***	3.52*	1998	0.46***	4.78***	0.81***	-5.04***	2004
岩手 (1967)	0.15**	4.00**	0.88***	1.19	1998	0.02	0.66	0.67***	-1.67**	1997
宮城 (1968)	0.15**	7.32**	0.90***	-3.29*	2003	0.17**	-0.42***	0.88***	-0.43	1998
秋田 (1968)	0.55***	4.86***	0.89***	2.05***	2001	0.03	0.78***	0.73***	-2.67***	2001
山形 (1966)	0.30***	2.91***	0.86***	-1.00**	2001	0.01	0.56	0.77***	-1.94**	2002
福島 (1966)	0.09*	1.85*	0.83**	0.76	1995	0.02	1.04	0.88***	-1.84**	2000
茨城 (1992)	0.06†	-1.59***	0.92***	-1.09***	1999	0.06†	-4.71†	0.87***	-2.64*	1999
栃木 (1966)	0.15**	-2.85**	0.86***	-0.05	1999	0.27***	-5.69***	0.90***	-2.45***	1999
群馬 (1992)	0.01	-1.03	0.89***	-1.55**	2005	0.10*	-3.80*	0.88***	-2.62***	1998
埼玉 (1992)	0.10*	-3.75*	0.93***	-1.96***	1999	0.03	-2.47***	0.88***	-2.49**	2005
千葉 (1992)	0.02	-2.36	0.92***	-2.20***	1999	0.01	-1.80***	0.89***	-4.19***	2005
東京 (1991)	0.18**	8.06**	0.76**	0.75	2005	0.00	0.27	0.89***	-0.95	1994
神奈川 (1992)	0.11*	-3.77*	0.90***	-1.89***	1999	0.00	-0.07	0.67***	0.43	2007
新潟 (1966)	0.03	2.93	0.86**	0.89	1998	0.00	-0.13	0.86***	-1.29	1999
富山 (1966)	0.01	0.42	0.74***	-0.37	2000	0.06†	-1.32†	0.77***	-1.46**	1999
石川 (1992)	0.12*	5.17*	0.85***	-1.61	2000	0.02	-0.73	0.71***	-1.37*	1997
福井 (1967)	0.17**	3.54**	0.86***	0.53	1998	0.09*	2.22*	0.84***	-0.29	1998
山梨 (1966)	0.25***	-5.13***	0.89***	-2.09***	2004	0.21***	-7.14***	0.83***	-3.42**	2003
長野 (1966)	0.06†	-1.42†	0.93***	-0.61*	2002	0.18**	-4.07***	0.81***	-2.39**	2000
岐阜 (1992)	0.06†	-0.91†	0.84***	-0.32	1998	0.11*	-2.57*	0.89***	-1.02*	2000
静岡 (1992)	0.11*	-2.68*	0.89***	-1.19**	2002	0.20***	-3.74***	0.87***	-1.51**	1999
愛知 (1992)	0.06†	-2.00†	0.89***	-0.39	1999	0.08*	-0.25*	0.80***	0.08	1994
三重 (1992)	0.01	-0.57	0.87***	-0.76**	1997	0.01	-1.01	0.86***	-1.23*	1998
滋賀 (1993)	0.04	-1.70***	0.89***	-1.42**	2003	0.05	-3.53	0.86***	-2.51**	2000
京都 (1991)	0.29***	13.22***	0.89***	-0.94	1999	0.17**	5.10**	0.88***	-1.23	1997
大阪 (1991)	0.06†	3.58†	0.82***	0.30	1998	0.03	1.05	0.88***	0.12	1997
兵庫 (1992)	0.07†	5.17†	0.91***	-1.10	1998	0.06†	2.08†	0.69***	-1.29	1997
奈良 (1992)	0.01	0.67	0.92***	-0.38***	1997	0.03	3.82	0.89***	-1.16	1998
和歌山 (1966)	0.11*	2.21***	0.72***	-1.21†	2005	0.04	4.29	0.88***	-2.05	1998
鳥取 (1966)	0.03	0.67	0.69***	-0.14	2001	0.01	-1.23	0.63***	-4.60***	2006
島根 (1966)	0.05	1.02	0.77***	-0.31	2000	0.00	-0.23	0.67***	-1.34***	1996
岡山 (1992)	0.02	1.97	0.89***	-1.03	1998	0.05	-0.82	0.22**	-1.11	1981
広島 (1992)	0.03	2.54	0.91***	-2.55**	1999	0.00	0.06	0.33***	-0.10	1980
山口 (1967)	0.13**	2.57**	0.83***	-0.89	2002	0.21***	-1.35***	0.42***	-1.14†	1983
徳島 (1966)	0.46***	11.87***	0.90***	1.67	1998	0.01	0.79	0.52***	-4.54***	1998
香川 (1966)	0.03	-0.84	0.79***	-0.78*	1996	0.07†	-2.03†	0.73***	-1.44*	1999
愛媛 (1966)	0.24***	5.84***	0.78***	0.31	1998	0.13**	2.16**	0.82***	-1.64*	1997
高知 (1966)	0.65***	7.86***	0.90***	0.51	1997	0.39***	7.00***	0.88***	-3.18*	1999
福岡 (1967)	0.50***	12.76***	0.88***	0.88	1997	0.30***	1.39***	0.76***	-1.40**	1998
佐賀 (1967)	0.40***	3.32***	0.84***	0.79	1998	0.09*	1.21*	0.73***	-1.79***	1996
長崎 (1967)	0.13**	5.99**	0.91***	-0.88	2000	0.10*	0.81*	0.67***	-0.43	1997
熊本 (1967)	0.37***	8.43***	0.89***	2.48	1994	0.46***	-2.03***	0.81***	-0.86*	2008
大分 (1967)	0.42***	5.47***	0.84***	0.02	2000	0.16***	-0.86**	0.39***	-2.31***	1997
宮崎 (1967)	0.50***	6.27***	0.86***	3.10**	1998	0.25***	1.47***	0.83***	-1.20**	1998
鹿児島 (1967)	0.50***	7.17***	0.85***	6.08***	1997	0.41***	3.10***	0.91***	-2.47***	2008
沖縄 (1973)	0.42***	11.02***	0.91***	1.84	1996	0.56***	10.09***	0.79***	7.04***	2021

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4a 都道府県別の18歳人口による回帰推定の結果(就職率)

都道府県	自県就職率					三大都市圏就職率				
	全期間		max. F		年度	全期間		max. F		
	R ²	勾配	R ²	勾配		R ²	勾配	R ²	勾配	
北海道(1991)	0.50***	0.00***	0.90***	-0.00***	1994	0.61***	0.00***	0.74***	0.00	1969
青森(1968)	0.14**	0.00**	0.75***	-0.00	1976	0.16**	0.00**	0.65***	-0.00***	1994
岩手(1967)	0.00	-0.00	0.80***	-0.00*	1978	0.38***	0.00***	0.81***	-0.00**	1992
宮城(1968)	0.14**	0.00**	0.82***	-0.00***	1995	0.42***	0.00***	0.84***	-0.00***	1988
秋田(1968)	0.02	0.00	0.77***	-0.00***	1997	0.39***	0.00***	0.84***	-0.00*	1993
山形(1966)	0.03	0.00	0.79***	-0.00***	1993	0.55***	0.00***	0.82***	0.00†	1991
福島(1966)	0.00	-0.00	0.66***	-0.00***	1999	0.65***	0.00***	0.92***	0.00***	1991
茨城(1992)	0.09*	0.00*	0.76***	-0.00***	1995	0.32***	0.00***	0.91***	0.00**	1986
栃木(1966)	0.19***	0.00***	0.83***	-0.00***	1995	0.52***	0.00***	0.92***	0.00***	1986
群馬(1992)	0.36***	0.00***	0.91***	-0.00***	1993	0.53***	0.00***	0.91***	0.00***	1984
埼玉(1992)	0.06*	-0.00*	0.90**	-0.00***	1990	0.79***	0.00***	0.95***	0.00***	1993
千葉(1992)	0.06*	-0.00*	0.93***	-0.00***	1994	0.04	-0.00	0.89***	-0.00***	1993
東京(1991)	0.47***	0.00***	0.90***	0.00**	1983	0.32***	0.00***	0.82***	-0.00†	1987
神奈川(1992)	0.06*	-0.00*	0.90***	-0.00***	1990	0.01	-0.00	0.94***	-0.00***	1993
新潟(1966)	0.29***	0.00***	0.87***	-0.00*	1993	0.55***	0.00***	0.92***	0.00	1991
富山(1966)	0.39***	0.00***	0.92***	-0.00***	1990	0.63***	0.00***	0.89***	0.00***	1984
石川(1992)	0.26***	0.00***	0.90***	-0.00***	1993	0.42***	0.00***	0.85***	0.00**	1987
福井(1967)	0.35***	0.00***	0.84***	-0.00***	1992	0.74***	0.00***	0.87***	0.00***	1986
山梨(1966)	0.28***	0.00***	0.82***	-0.00***	1994	0.71***	0.00***	0.94***	0.00***	1984
長野(1966)	0.44***	0.00***	0.93***	-0.00**	1992	0.60***	0.00***	0.88***	0.00***	1986
岐阜(1992)	0.38***	0.00***	0.88***	-0.00***	1991	0.37***	0.00***	0.84***	-0.00*	1994
静岡(1992)	0.47***	0.00***	0.93***	-0.00	1992	0.37***	0.00***	0.93***	-0.00	1987
愛知(1992)	0.05†	0.00***	0.95***	-0.00*	1989	0.02	0.00	0.60***	0.00	1978
三重(1992)	0.13**	0.00***	0.73***	-0.00***	1994	0.40***	0.00***	0.68***	0.00	1988
滋賀(1993)	0.00	0.00	0.85***	-0.00***	1994	0.01	0.00	0.88***	0.00***	1986
京都(1991)	0.32***	0.00***	0.94***	0.00**	1987	0.25***	0.00***	0.85***	0.00	1986
大阪(1991)	0.12**	0.00**	0.91***	-0.00*	1987	0.14**	0.00**	0.34***	0.00	1987
兵庫(1992)	0.33***	0.00***	0.93***	0.00	1987	0.24***	0.00***	0.85***	0.00	1986
奈良(1992)	0.00	0.00	0.92***	0.00	1989	0.01	-0.00	0.85***	0.00	1986
和歌山(1966)	0.50***	0.00	0.87***	-0.00***	1997	0.59***	0.00***	0.90***	-0.00	1994
鳥取(1966)	0.15***	0.00**	0.79***	-0.00***	1997	0.69***	0.00***	0.86***	0.00***	1991
島根(1966)	0.05†	-0.00†	0.68***	-0.00***	1998	0.71***	0.00***	0.93***	0.00***	1993
岡山(1992)	0.35***	0.00***	0.92***	-0.00***	1992	0.61***	0.00***	0.89***	0.00***	1986
広島(1992)	0.45***	0.00***	0.93***	0.00***	1987	0.41***	0.00***	0.86***	0.00**	1978
山口(1967)	0.39***	0.00***	0.79***	0.00	1997	0.77***	0.00***	0.91***	0.00***	1991
徳島(1966)	0.03	0.00	0.71***	-0.00***	1998	0.68***	0.00***	0.92***	0.00***	1993
香川(1966)	0.37***	0.00***	0.92***	-0.00†	1991	0.64***	0.00***	0.89***	0.00***	1978
愛媛(1966)	0.18***	0.00***	0.87***	-0.00***	1995	0.77***	0.00***	0.89***	0.00***	1986
高知(1966)	0.27***	0.00***	0.89***	-0.00***	1998	0.55***	0.00***	0.89**	0.00	1994
福岡(1967)	0.39***	0.00***	0.93***	-0.00	1987	0.48***	0.00***	0.82***	0.00	1976
佐賀(1967)	0.02	0.00	0.69***	-0.00***	1998	0.51***	0.00***	0.73***	0.00**	1993
長崎(1967)	0.08*	0.00*	0.68***	-0.00***	1998	0.44***	0.00***	0.85***	-0.00***	1992
熊本(1967)	0.06†	0.00†	0.75***	-0.00***	1997	0.54***	0.00***	0.81***	0.00**	1993
大分(1967)	0.11**	0.00**	0.79***	-0.00***	1993	0.74***	0.00***	0.89***	0.00***	1991
宮崎(1967)	0.00	0.00	0.65***	-0.00***	1997	0.30***	0.00***	0.64***	-0.00	1993
鹿児島(1967)	0.00	-0.00	0.47***	0.00	1978	0.61***	0.00***	0.85***	0.00*	1994
沖縄(1973)	0.10*	0.00*	0.25***	-0.00	1999	0.50***	0.00***	0.86***	-0.00	1986

† p < .10, * p < .05, ** p < .01, *** p < .001

表 4b 都道府県別の有効求人倍率による回帰推定の結果（就職率）

都道府県	自県就職率					三大都市圏就職率				
	全期間		max. F		年度	全期間		max. F		
	R ²	勾配	R ²	勾配		R ²	勾配	R ²	勾配	
北海道 (1991)	0.05 [†]	-6.54 [†]	0.88***	-5.41*	1997	0.00	-0.31	0.72***	2.46*	1994
青森 (1968)	0.24***	-8.07***	0.52***	0.80	2002	0.15**	-5.76***	0.58***	11.43**	1994
岩手 (1967)	0.01	1.31	0.46***	8.42***	2002	0.06 [†]	-4.34***	0.81***	0.94	1994
宮城 (1968)	0.06 [†]	-5.21 [†]	0.72***	2.98	1998	0.12**	-3.22**	0.80***	2.20	1988
秋田 (1968)	0.02	0.00***	0.77***	-0.00***	1997	0.39***	-8.78***	0.85***	-0.49	1993
山形 (1966)	0.02	-1.91***	0.59***	4.70**	1999	0.36***	-8.16***	0.86***	-5.04***	1993
福島 (1966)	0.02	2.25	0.42***	6.64**	1999	0.09*	-4.74*	0.90***	-4.10***	1993
茨城 (1992)	0.07*	3.34*	0.66***	-2.33 [†]	1995	0.24***	4.39***	0.89***	1.99***	1988
栃木 (1966)	0.21***	6.49***	0.75***	0.81	1996	0.20***	3.42***	0.88***	0.69	1985
群馬 (1992)	0.13***	6.84***	0.88***	0.25	1994	0.16***	3.12***	0.87***	1.68*	1984
埼玉 (1992)	0.32***	5.82***	0.87***	2.31***	1990	0.31***	5.45***	0.90***	2.06***	1994
千葉 (1992)	0.18***	6.28***	0.89***	3.48***	1988	0.13***	4.89***	0.81***	1.21	1993
東京 (1991)	0.00	-1.31	0.79***	-0.14	1992	0.00	0.06***	0.77**	0.50***	1988
神奈川 (1992)	0.39***	8.19***	0.84***	4.49***	1994	0.40***	1.99***	0.93***	1.00***	1994
新潟 (1966)	0.00	-0.38***	0.82***	0.64	1998	0.02	-2.35***	0.90***	-2.57*	1993
富山 (1966)	0.00	0.05	0.89***	-0.80	1993	0.00	-0.35	0.80***	0.61	1978
石川 (1992)	0.01	-2.17	0.86***	-1.53	1994	0.02	-0.87	0.82***	2.54*	1988
福井 (1967)	0.10*	-3.80*	0.78***	-0.56	1994	0.23***	-3.72***	0.75***	-2.40***	1993
山梨 (1966)	0.28***	7.06***	0.76***	0.58	1997	0.24***	7.40***	0.90***	2.57*	1984
長野 (1966)	0.13**	6.80**	0.90***	-1.04	1993	0.05 [†]	2.39 [†]	0.83***	1.02	1984
岐阜 (1992)	0.19***	3.17***	0.84***	0.87***	1997	0.20***	2.18***	0.82***	0.23	1994
静岡 (1992)	0.30***	6.22***	0.92***	0.63	1993	0.30***	1.56***	0.91***	0.22	1988
愛知 (1992)	0.37***	4.08***	0.91***	1.40***	1993	0.25***	0.22***	0.55***	-0.06	1978
三重 (1992)	0.03	1.61	0.68***	0.50	1995	0.06 [†]	1.96 [†]	0.84***	1.43**	1989
滋賀 (1993)	0.12**	4.66**	0.83***	-0.73	1994	0.28***	5.90***	0.85***	2.94***	1985
京都 (1991)	0.03	-5.68***	0.86***	6.33***	1993	0.01	-0.64	0.81***	5.04***	1987
大阪 (1991)	0.07*	5.27*	0.86***	5.14***	1994	0.01	0.12	0.36***	0.07	1995
兵庫 (1992)	0.01	-1.65	0.89***	3.52**	1994	0.01	1.01	0.79***	1.56*	1993
奈良 (1992)	0.10*	2.78*	0.86***	0.87	1992	0.30***	-8.72***	0.89***	6.24***	1988
和歌山 (1966)	0.01	-1.56	0.90***	-1.96***	1997	0.00	-0.76	0.89***	1.03	1995
鳥取 (1966)	0.00	-1.07	0.71***	1.98	1999	0.10**	-5.91**	0.79***	-5.96***	1994
島根 (1966)	0.08*	2.27*	0.29***	3.07**	1998	0.07*	-4.82*	0.86***	-3.66**	1994
岡山 (1992)	0.00	0.74	0.88***	-0.07	1994	0.02	1.14	0.76***	2.29**	1987
広島 (1992)	0.00	0.00	0.86***	5.15***	1989	0.02	0.69	0.82***	-0.35	1975
山口 (1967)	0.05 [†]	-2.28 [†]	0.83***	-1.07	1994	0.17***	-3.92***	0.78***	-1.69*	1993
徳島 (1966)	0.09*	-4.20*	0.56***	4.18 [†]	1999	0.35***	-10.14***	0.87***	-4.42**	1994
香川 (1966)	0.01	-1.64	0.89***	-1.24	1993	0.00	-0.20	0.83***	-1.54	1978
愛媛 (1966)	0.11*	-5.09*	0.74***	2.08	1998	0.23***	-6.15***	0.76***	-3.77**	1994
高知 (1966)	0.35***	-9.00***	0.71***	0.58	1998	0.48***	-8.03***	0.89***	-1.76	1994
福岡 (1967)	0.42***	-14.64***	0.91***	-8.78***	1994	0.23***	-3.22***	0.83***	-1.58***	1976
佐賀 (1967)	0.07*	-3.30***	0.50***	-2.82***	1999	0.25***	-7.54***	0.72***	-4.65*	1993
長崎 (1967)	0.00	-0.28	0.59***	-1.31	1999	0.09*	-4.84***	0.82***	0.97	1993
熊本 (1967)	0.19***	-6.41***	0.57***	4.54	1999	0.18***	-4.49***	0.78***	-1.94	1993
大分 (1967)	0.23***	-5.83***	0.63***	1.01	1998	0.40***	-11.34***	0.82***	-7.38***	1998
宮崎 (1967)	0.04***	-2.38***	0.40***	6.92**	1988	0.23***	-7.62***	0.65***	-0.69	1994
鹿児島 (1967)	0.01	-1.21	0.23***	5.69*	1999	0.42***	-17.23***	0.86***	-7.09*	1994
沖縄 (1973)	0.01	-0.41	0.45***	5.95**	1999	0.30***	-9.32***	0.85***	-16.27***	1993

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4aは自県就職率と三大都市圏就職率を18歳人口で推定した結果であるが、自県就職率の全期間の R^2 が全国のそれを上回る都道府県は見当たらず、三大都市圏の全期間の値は26の道県で上回っている。勾配の符号はさほど全国の傾向と変わらないが、 $\max.F$ となる年度は都道府県18歳人口のピーク以前にあるケースが自県就職率で10都道府県、三大都市圏就職率で15都道府県となっている。なお、自県就職率と三大都市圏就職率を有効求人倍率で推定した場合、表4bに示す通り、 R^2 が全国のそれを上回るのは自県就職率で33道府県、三大都市圏就職率では42県となった。自県就職率の勾配は25府県が全国と異なる正の符号、三大都市圏就職率の勾配は29道府県が全体とは異なる負の符号を示している。 $\max.F$ となる年度は、自県就職率が県を除き18歳人口のピーク後となり、三大都市圏就職率では12都県がピーク前となる。

4. 結論：高学歴社会の地域志向とシグナリング

これまでの分析から得られた知見は、概ね以下のように要約できる。(1) 自県進学率は18歳人口減少を機に大学は上昇、短期大学は減少に転じ、自県就職率は2000年代に入るまで減少し続けている。(2) 三大都市圏への大学進学率は、18歳人口が減少期に入ると同時に上昇するが、三大都市圏における収容力のマージンは地元以外からの進学をも促す。(3) 自県就職率と三大都市圏就職率のいずれもおしなべて減少傾向にあるが、有効求人倍率より18歳人口の変動に依存する。(4) 18歳人口は都道府県単位の自県進学率に対して、三大都市圏進学率や自県および三大都市圏いずれの就職率よりも説明力が大きい。(5) 18歳人口の自県進学率に対する影響関係に最も大きな構造変化が表れる時期は、18歳人口が比較的少ない県で早く、それ以外の都道府県は大部分が全国の18歳人口のピーク前後にある。

これらの知見は、人口変動が高校卒業後の進路分化に対し、景気動向よりも明らかに大きな影響力を与えており、とりわけ自県進学と密接な関係にあることを示唆するものである。三大都市圏への進学には、地域移動に伴う家計負担や教育機会の選別性などの諸条件を満たす必要があることから、18歳人口の影響力は減殺される。その結果、18歳人口の減少期を経て収容力に生じるマージンは、大都市圏への進学よりも自県進学を促すよう、相対的に強く作用すると考えられる。

ここで見落としてはならないのは、景気動向により自県進学を選びがちな地域もあれば、大都市圏への就職移動を選びがちな地域まで、都道府県間の進路分化に多様性があり、その変化の過程は時間を含めて一様ではない点である。人的資本論やスクリーニング、シグナリングなどの諸仮説との整合性は、地域の実情に応じて異なったものになるかもしれない。「感情資本」(Reay 2000, pp. 570-572)による家族の再生産が自県進学を促したり、密なネットワークを重視して重複のないコンタクト間に生じる「構造的空隙」(Burt 訳書 2006, 10-12頁)のメリットを放棄したりするような進路決定もありうるだろう。しかしながら、大都市圏への進学移動が自県進学に圧されて衰えているわけではない以上、学歴主義も強かに残

存しているはずである。

いずれにせよ、高学歴社会を牽引しているのは景気動向や産業構造などの経済変数ではなく、教育達成過程における格差や不平等の所在はさほど自明ではない。少なくとも18歳人口が減少期に入って以降、地域志向が進路分化に反映されやすい状況にはあるが、2000年代における大学進学率の急激な上昇などは、構造変化が最も顕在化する時期を概して過ぎてから起きている現象であり、収容力のマージンとは別種の力学に支えられている可能性を考えなければなるまい。

〈註〉

- 1) 旧帝大への地域移動を扱ったクロスセクションデータ分析は池田・田垣内（2024）、国立と私立の設置者別に注目した高等教育の地方分散化政策の分析については小林（2006）を参照されたい。
- 2) 三大都市圏には東京圏（埼玉、千葉、東京、神奈川）、名古屋圏（岐阜、愛知、三重）、大阪圏（京都、大阪、兵庫、奈良）が含まれる。
- 3) クロスセクショナルな分析のため時系列的な変化までは検討されていないが、池田・田垣内（2024, 14-16頁）では旧帝大への進学移動から東西の移動軸と移動先の集中度を抽出している。
- 4) 図示はしないが、三大都市圏就職率について図2と同様の地方区分を用いて分散分析を行った結果、2016年度以降、統計的な有意差は認められなかった。
- 5) 重回帰モデルの R^2 は自由度を調整した補正值、勾配の回帰係数は非標準化値を示してある。
- 6) 進学移動と就職移動の関係に大きな変化が現れる時期を、遠藤（2022, 102頁）では1991年とされているが、本稿の分析ではそれ以前の時点で構造変化の検定統計量が最大の値を示している。
- 7) 学歴社会や学歴主義には、全体から得られる「生態学的相関」を「個々の相関」に代替する誤謬（Robinson 1950, pp. 351-354）が含まれている可能性がある。潮木（2008, 7頁）では、全国を一本化した場合と都道府県やグループ別に検討した場合とでは、進学率の変化に異なる傾向性が見られることが指摘されている。
- 8) 18歳人口のピーク年度と2023年度の18歳人口の相関係数は0.58である。なお、同様に18歳人口と R^2 の相関係数を算出した場合、自県進学率で-0.47、三大都市圏で-0.06となる。

〈引用文献〉

- Burt, R.S. 1992 *Structural Holes: The Social Structure of Competition*. Harvard University Press.
（=2006, 安田雪訳 『競争の社会的構造—構造的空間の理論—』 新曜社）。
- 遠藤 健 2022, 『大学進学にともなう地域移動—マクロ・マイクロデータによる実証的検証—』 東信堂。
- Havighurst, R.J. 1958, "Education, Social Mobility and Social Change in Four Societies", Halsey, A.H., Floud, J., and Anderson, C.A. eds. *International Review of Education* Vol.6 No.2. (=1963, 潮木

- 守一 訳 「四ヶ国における教育と社会移動」、ハルゼー, A.H. 他編 『経済発展と教育—現代教育改革の方向—』 東京大学出版会, 104-125頁).
- 朴澤泰男 2016, 『高等教育機会の地域格差—地方における高校生の大学進学行動—』 東信堂。
- 池田岳大・田垣内義浩 2024, 「出身都道府県から旧帝国大学への地域移動—多次元尺度構成法を用いた地域移動の分散・集中の諸相—」、『キャリア教育研究』 第43巻, 第1号, 11-19頁。
- 加瀬和俊 1997, 『集団就職の時代—高度成長のいない手たち—』 青木書店。
- 片瀬一男・阿部晃士 1997, 「沿岸地域における学歴主義と教育達成—『利口、家もたず、達者、家もたず』—」、『教育社会学研究』 第61集, 163-182頁。
- 小林雅之 2006, 「高等教育の地方分散化政策の検証」、『高等教育研究』 第9集, 101-119頁。
- 野村正實 2014, 『学歴主義と労働社会—高度成長と自営業の衰退がもたらしたもの—』 ミネルヴァ書房。
- Reay, D. 2000, “A useful extension of Bourdieu’s conceptual framework?: emotional capital as a way of understanding mothers’ involvement in their children’s education?”, *The Sociological Review*, Vol.48, November 2000, pp.568-585.
- Robinson, W. S. 1950, “Ecological Correlations and the Behavior of Individuals”, *American Sociological Review*, 15, No.3, pp. 351-357.
- 佐藤 香 2004, 『社会移動の歴史社会学—生業／職業／学校—』 東洋館出版社。
- 上山浩次郎 2012, 「大学収容率からみた教育機会の地域間格差」、『北海道大学大学院教育学研究紀要』 第115号, 1-15頁。
- 潮木守一 2008, 「大学進学率上昇をもたらしたのは何なのか—計量分析と経験知の間で—」、『教育社会学研究』 第83集, 5-22頁。

*本研究は科学研究費助成事業基盤研究(C)の採択課題「グローバル化における教育機関の展開過程と地域変容に関する比較制度分析」(22K02310)の一環として行われた。

The Current State and Future Considerations of the English Minor Course at Saga University in 2024

Brendan VAN DEUSEN*

2024年度の佐賀大学英語副専攻コースの現状と課題

ヴァンドゥーセン ブレンダン

【Abstract】

This paper examines the English Minor Course at Saga University, launched in 2023 to develop students' communication, interpersonal, and intercultural skills for global leadership. The program includes a structured curriculum, diverse enrollment, and a mandatory short-term study abroad component, notably collaborating with Slippery Rock University. The study emphasizes the course's potential to add value to students, enhance international partnerships, and strengthen the university's educational offerings. Challenges such as reliance on part-time lecturers, lack of concrete program goals, and limited promotion are identified alongside opportunities for future research. This research begins a long-term effort to refine the program and address future needs.

【キーワード】 English as a Foreign Language, Minor Course

1. Background

University minor programs allow students to gain skills, knowledge, and credentials in addition to their major area of study. Although commonly offered in many Western countries, data from the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT, 2013) suggests this is more of a recent development in Japanese universities. The data shows that in 2005 only 128 universities in Japan offered such programs. However, over the following six years that number increased by 57% to 201 universities. Despite this, only 33 national universities (roughly 38%) offered minor courses at the time. Although recent comprehensive data is not readily available, new minor programs continue to be established around Japan.

In April 2023, Saga University established its English Minor Course. The move was conducted in accordance with the university's 2020 mid-term plan (Saga University, 2020),

*Organization for General Education, Full-time Faculty

which states that the university seeks to strengthen minor course offerings in order to meet the needs of modern society. The English Minor Course traces its roots to a pre-existing English intensive course. In 2013, Saga University established the International Study Abroad Curriculum (ISAC), designed for students who already had attained a certain proficiency in English and wished to benefit from study abroad and intensive study conducted in English. In 2020, ISAC was changed to the Program for Academic and Global English (PAGE), with the curriculum emphasizing the need to develop digital as well as interpersonal and intercultural skills necessary for global citizenship in addition to ISAC's focus on language and study abroad.

With Saga University's initiative to create minor course offerings, PAGE ran for only two years before morphing into the current version of the English Minor Course. The purpose of this paper is to provide an overview of the current state of the English Minor Course and discuss future opportunities and challenges. As this program is still in its early stages and the author has only recently joined as its coordinator, this research marks the beginning of a long-term process of understanding and refining its role within the university. The paper begins by providing basic information about the course, followed by an exploration of a unique opportunity with Slippery Rock University (SRU), located in Pennsylvania, USA. It then outlines the author's vision of a student-centered, value-added role for the program within the university. In each of these sections, the author outlines future considerations and actionable ideas to improve and develop the program.

2. The English Minor Course in AY 2024

The English Minor Course is a three year program open to students in all faculties except Medicine: Agriculture, Art and Regional Design, Economics, Education, and Science and Engineering. The program aims to develop students who have the communication, interpersonal, and intercultural skills to take on leadership positions in a global context. Classes consist of interactive communication-based and content-based classes, as well as one mandatory short-term study abroad.

2.1 Structure of the minor course

Students apply to join the program at the beginning of their first year. A placement test is administered and intake is capped at 50 students. The number of students who applied for the English Minor Course was 129 in 2023 and 127 in 2024, resulting in an acceptance rate of 39% and 39% respectively. In terms of faculty representation, Table 1 summarizes the distribution by faculty for both 2023 and 2024, minus students who chose to leave the course.

With the exception of Science and Engineering in 2023 and slightly overall lower numbers for Art and Regional Design, the distribution of students appears balanced and consistent over the first two years.

	Agriculture	Art	Education	Economics	Science
2023 Cohort	9	7	10	11	2
2024 Cohort	11	6	9	14	11

Table 1. Number of students by faculty enrolled in the English Minor Course

Regarding faculty members, the author, who also serves as the program coordinator, is the only full-time faculty member to teach classes in the English Minor Course. All other classes are taught by nine outside part-time lecturers. In AY 2024, the author was scheduled to teach six classes for 10 credits within the minor course, compared to 17 classes for 38 credits by part-time lecturers. In other words, it can be seen that part time teachers account for 90% of the teachers, 80% of the credits, and 73% of the classes within the English Minor Course. In AY 2025, it is expected that the author will teach six classes for 12 credits, with all other classes taught by outside part-time teachers.

To complete the English Minor Course students are required to acquire 16 or more credits from among the designated courses. The required courses are as follows: In year 1, Intensive English I and II; in year 2, Intensive English III and IV, and Intercultural Communication I and II; and in year 3, Intercultural Communication III and IV. These classes are divided into two sections. The 50 students are placed randomly into two groups (A group and B group) in year 1 and these groups are reconfigured in year 2.

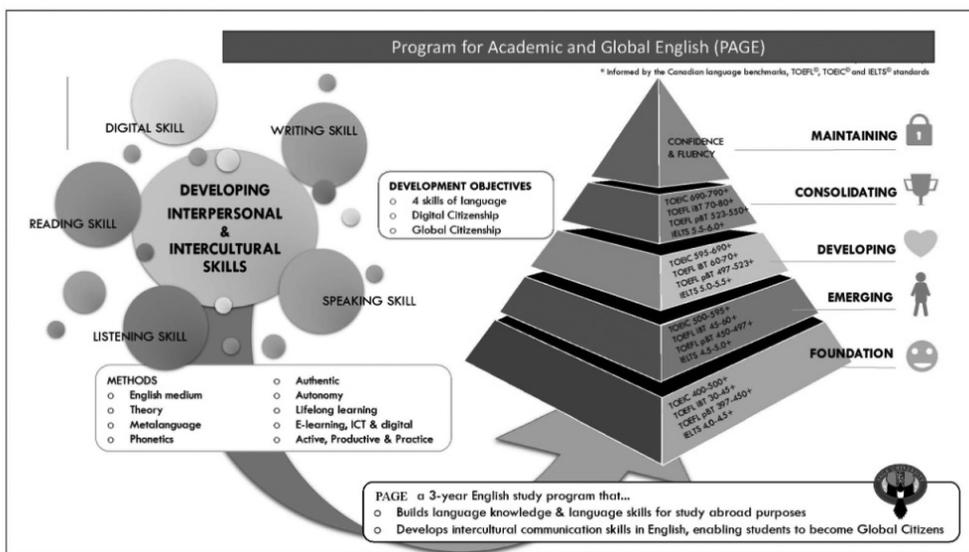
In addition to the required courses mentioned above, students must take 2 credits of content-based classes and one short-term study abroad. The study abroad options range from participating in an online study abroad program with Slippery Rock University to one of the overseas study trips to SRU, Pacific University (USA), Latrobe University (Australia), Taiwan, or Spain. The programs in Taiwan and Spain are conducted in English, hence are considered eligible for the English Minor Course. All programs except for the trip to Slippery Rock University are run by the International Center's Saga University Study Abroad Program (SUSAP).

2.2 Future considerations: managing change

One area of consideration for the future is overall program and curriculum management. One such area to consider is clarifying the stated goals and policies of the English Minor Course. Comparing the website for PAGE to the English Minor Course (Saga University, 2023), the

goals appear to have become fewer and vaguer. As shown in Figure 1, PAGE lists concrete objectives and progression. The website also lists regular CASEC testing as a way of measuring students' progress. Conversely, the English Minor Course lists developing students with a global perspective and communicative ability but lacks concrete details. Although a basic curriculum for the English Minor Course tree does exist on the website, it lacks information on how the courses relate to each other and to the program goals. Based on this, a comprehensive curriculum guide could be developed and distributed to teachers, offering clear guidance on how courses align with one another and with the program's overarching goals.

Figure 1. PAGE Curriculum Concept



Note: Reproduced from Saga University https://www.oge.saga-u.ac.jp/PAGE/?page_id=14

Related to this is filling in the gaps of institutional knowledge. During the years of ISAC and PAGE, Hayase (2006, 2017, 2020) published research outlining guidelines and principles for English education at Saga. One example was a proposal for Saga University's Principles for English Education (Hayase, 2006). Hayase also advocated for adopting content-based (2016) and CLIL-based (2020) approaches, which appear to be reflected in the formation of PAGE and its revised goals related to content-based classes and global citizenship. While it is likely that other stakeholders and processes played a role in these changes, Hayase's research indicates a certain degree of active management and program evaluation was being undertaken. This, in turn, raises the question of who will evaluate the English Minor Course, how such evaluations will inform ongoing improvements, by what mechanisms the program

will adapt to meet future needs, and how this will be documented.

The final point to consider relates to the number of outside part-time teachers being relied upon to cover the majority of classes in the English Minor Course. A certain amount of outside teachers is inevitable for any program. In some cases, such as hiring a part-time teacher from SRU to do a joint lesson with American students, unique value is gained. However, with the current ratio of full-time to part-time teachers, the impact on the program, including effort to find and onboard teachers, opportunity costs associated with a lack of full-time teachers contributing to the program, and student perceptions about this situation warrants further investigation.

3. Relationship with Slippery Rock University

Since 2016, Saga University has had a fruitful exchange partnership with Slippery Rock University (SRU), and key aspects of this relationship directly concern the English Minor Course. This section will focus on short-term exchange between the two schools. After this, the author will consider ways to solidify the viability of the Overseas Practicum, which is a key component of exchange with SRU.

3.1 Two-way short-term exchange

As mentioned above, the short-term study trip to SRU is separate from SUSAP and it is the location for the Overseas Practicum course. Every year, the English Minor Course program coordinator leads a group of students to SRU for a 10 day language and culture study trip in collaboration with SRU faculty, particularly Prof. Ishimaru of the SRU Dept. of Languages, Literatures, Cultures, and Writing.

Conversely, there is an annual 10 day SRU study trip to Saga led by Prof. Ishimaru. The English Minor Course coordinator plays a role in the planning and budget authorization process and assists the office staff members in the Organization for General Education who facilitate the preparation and execution of the program. Another connection is that Prof. Ishimaru is hired part-time to teach one of the two groups for Intercultural Communication I. The class begins online but culminates with the Saga students joining the SRU students on a field trip to Nagasaki. One further aspect of preparing for the SRU trip is recruiting volunteers to be conversation partners and to general helpers. These students are typically students from the English Minor Course, with students who have previously visited SRU being particularly well-suited for this role. Other volunteers might also be members of the Global Supporters Volunteer group run through the International Center. Not surprisingly, there is overlap between the English Minor Course and Global Supporters.

Hence, there is a reciprocal structure in place with each school sending a group for a similar period of time. The point person on each end works with their counterpart on two-way mobility and collaboration. At the student level, a visit by one group can help build interest and momentum for future exchange. More than once, a student who came to Saga on the short-program returned the following year for long-term exchange, further deepening the relationship between the two schools. When SRU students study at Saga, they take some of the content classes offered in English related to the English Minor Course, which provides extra benefit to those Japanese students by making the classroom more international.

3.2 Future considerations: survival of the Overseas Practicum

As described above, the short-term exchange is a central component of maintaining a solid partnership with SRU. The Overseas Practicum has space for a maximum of 15 students, with a five-student minimum requirement. Upon re-starting the Overseas Practicum after the COVID-19 pandemic, the number of Saga students registering for the trip remains low, with eight students in AY 2023 and just five in AY 2024. This can be attributed to a variety of factors such as the weak yen, inflation, staff turnover, and competition from other short-term study abroad options. Unless the Overseas Practicum is revised, there is a risk that not enough students will register and an important element of the relationship with SRU will go dormant.

Perhaps the most significant factor affecting the Overseas Practicum is that the cost increased approximately 66% after the pandemic, from around ¥300,000 to over ¥500,000. Inflation and the weak yen are major factors in this increase. Another factor is the route going through Pittsburgh adds a significant cost to the airfare. Due to staff changes that resulted in the lack of a coordinator for months at a time, there was not enough time to a) actively advertise the trip at a sufficiently early date, and b) alter the route to cut costs. Finally, this year there was an increased number of other competing programs that attracted students.

In addressing these factors, staff turnover is not an issue this year, currency fluctuations and inflation are beyond our control, and a wide range of quality study trip options is good for students. What remains is to adjust the program to offer more value for students. Pre-pandemic, the Overseas Practicum spent time in cities such as New York before travelling to SRU. Adding a few days in a major hub city and travelling to SRU by train or bus is likely to have the dual effect of lowering costs and adding appeal. Moreover, if the trip is extended long enough to qualify for JASSO funding, this support could be advertised to attract more students. While it remains to be seen what will ultimately be done, it is clear that the plan for

the Overseas Practicum needs to be revised if it is to survive.

4. Toward a value-add student-centered program

In changing from PAGE to the English Minor Course, it might seem that only the name has changed. On the other hand, it can be argued that even changing the name repositions the English program within the university framework. In 2027, the first students will graduate with a diploma from their faculty and a certificate of completion from the English Minor Course. By offering this opportunity, the university establishes a connection between the minor course and each faculty, positioning the minor as a program that enhances the value of a student's education. This section will discuss ways in which the English Minor Course can add value to students and the university as a whole.

4.1 Minor Course as a value-added program

When considering the English Minor Course from a value-added perspective, students are an obvious stakeholder. MEXT (2013) details four main benefits for students who enrol in a minor program:

1. Gain supplemental knowledge to their major area of study
2. Acquire a wide range of knowledge outside their major area of study, aligned to their interests
3. Acquire skills and knowledge from a perspective different to their field of specialization that are necessary in society
4. Make the job-hunting process easier

Looking at each of these points within the context of the English Minor Course, it is possible to consider how students could benefit. 1) Supplemental knowledge about one's major can be acquired through content or projects undertaken in English classes. In particular, if students are permitted to choose task or project topics, they may use this as an opportunity to learn about their major in English. 2) Students can gain a range of knowledge related to English, global citizenship, or other areas not related to their major. 3) Communication skills in general, and interpersonal and intercultural competence in particular, are key components of the English Minor Course which are necessary in modern society but may be less emphasized in a student's area of study. 4) English and intercultural competence are highly valued skills in most fields, thus providing an advantage to students when job hunting.

A straightforward example of a student who could benefit from the English Minor Course would be a student in the faculty of Education training to be an elementary school or English teacher. The student would likely be taking classes about English language pedagogy, hence

improving their understanding of the language would be directly connected. Moreover, exposure to more English, improving overall communication, and intercultural communication could be useful when applying for a teaching job and working in a real classroom.

On the other hand, students from faculties other than Education comprise a majority of students in the English Minor Course. These students are likely to have more varied motivations and career paths. Studies from the U.S.A. (Strasser et al., 2002) and the Netherlands (van Deuren & Santema, 2012) suggest that students' reasons for choosing a major are similar to those for choosing a minor. Three of the most common reasons are: interest in the subject, influence of others, and career prospects. Collecting and analyzing data about students' initial motivations for joining, the perceived benefits through graduation, and the impact on their careers could illustrate the value of the English Minor Course not only to current and future students in all faculties, but also to the OGE and each respective faculty.

One specific way the English Minor Course could add value to both the OGE and each faculty is through promotion and recruitment efforts. Creating profiles of successful graduates to recruit students is common practice. Nonetheless, the English Minor Course does not currently do this. The value-added component of this promotional endeavor would be that each profile (or data at-large) could also be used by each faculty to provide a glimpse into the value of an English minor in combination with a degree from that faculty. The British director Marianne Elliott famously said, "If you can't see it, you can't be it." In other words, what kind of future does, for example, a degree in Art and Regional Design with a minor in English result in? Current and future students may themselves have only a limited idea of the possibilities. If students use similar criteria to choose a major as they do a minor, providing a compound story of successful graduates from each faculty could have a positive impact on recruiting high quality students in the future as well as providing guidance to current students already contemplating their future careers.

4.2 Future considerations: data collection

In discussing how the English Minor Course might add value to students and the university at-large, one course of action becomes clear: data collection is necessary. To start, a yearly questionnaire could be administered to collect a range of data from students including the following: reasons for joining, level of awareness of the course prior to joining, reasons for remaining, perceived benefits related to major area of study, perceived benefits related to knowledge or skills, results of language tests taken throughout the preceding year, perceived

benefits related to job-hunting, and future directions of the English Minor Course. Having access to students' attitudes can help improve the course as it changes over time. In the absence of a regular English proficiency testing regime, collecting self-reported data about language tests such as TOEIC or TOEFL taken over the previous year can help provide a more accurate measure of language growth.

While data collection prior to graduation may seem like a simple task, collecting data after graduation becomes more complicated. Nevertheless, one option would be creating a database of students who have graduated that can be updated annually. As students progress in their careers, certain people could be spotlighted on the website or brought in as guest speakers. How to reliably contact students after graduation becomes an issue to consider as students may no longer use their university email. Many universities create official Line accounts that can be used for managing and contacting people without using faculty or staff member's personal accounts.

Finally, more research into other minor courses around Japan could be valuable. It is not clear exactly how many other universities offer minors in English or related fields, but it is worth investigating what could be learned from other programs. One option could be to develop an informal information sharing partnership with a similar program.

5. Conclusion

The English Minor Course at Saga University is at a pivotal stage in its development. While its current presence on campus is relatively small, its potential to make a meaningful impact on students and the university is considerable. As this paper has shown, the program has the ability to offer students opportunities to enhance their communication skills, intercultural awareness, and professional prospects - all key competencies in today's globalized world.

Looking ahead, several areas require attention to ensure the program continues to grow and adapt. Establishing clear goals and policies, addressing the reliance on part-time lecturers, and strengthening promotional efforts are critical steps. Additionally, collecting and analyzing data on student experiences and outcomes will provide valuable insights to guide future improvements. Partnerships, such as the collaboration with Slippery Rock University, further highlight the unique experiences this program can offer and the value it brings to the university's academic landscape.

This research represents the beginning of a long-term process of development and refinement. As the program evolves, continuous evaluation and adaptation will be essential to ensuring that it remains relevant and effective in meeting the needs of students and society. By addressing these challenges strategically, the English Minor Course has the potential to

leave a lasting impact on its students and solidify its role within the university.

Reference

- Hayase, H. (2006). The beginning: Reforming English education at Saga University [Hajimaru, Saga Daigaku eigo kyouiku no kaikaku]. *Saga Journal of Higher Education*, 2, 67-76. https://saga-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=14428&item_no=1&attribute_id=21&file_no=1
- Hayase, H. (2016). Toward the integration of four skills in English education: From "skill-oriented" to "content-oriented" [Eigo Kyouiku ni okeru "4 Ginou no Tougou" o Mezashite: "Skill-oriented" kara "Content-oriented" e]. *Saga University Educational Practice Research*, 33, 119-130.
- Hayase, H. (2020). A CLIL-based approach to English instruction in university liberal arts courses [CLIL riron ni motozuita daigaku kyouyou kamoku no eigo ni yoru jugyou no kokoromi]. *Bulletin of the Organization for General Education*, 8, 1-19. https://saga-u.repo.nii.ac.jp/record/22506/files/01_hayase_P001-019.pdf
- Saga University. (2020). *Establishment of a cross-disciplinary minor program (2022-)* [Bunya Odangata Fukusenko Puroguramuno Kochiku (Reiwa 4 Nen~)]. Saga University's Vision for 2030 [Saga Daigaku Nokorekara Bijon 2023]. <https://vision.saga-u.ac.jp/2023/06/08/1-1-1/>
- Saga University. (2023). *What is PAGE?* [Page To Wa?]. https://www.oge.saga-u.ac.jp/PAGE/?page_id=14
- Strasser, S.E., Ozgur, C., & Schroeder, D.L. (2002). Strasser, S. E., Ozgur, C., & Schroeder, D. L. (2002). Selecting a business college major: An analysis of criteria and choice using the analytical hierarchy process. *American Journal of Business*, 17(2), 47-56. <https://citeseerx.ist.psu.edu/document?repid=rep1&type=pdf&doi=8017b55e0c2aa13143b57fc35c2bd043e4ab36dc#page=49>
- van Deuren, R., & Santema, S.C. (2012). How to choose your minor? Decision making variables used in the selection of a minor by undergraduate students from a Dutch university of applied sciences. *Paper Presented at UK and Ireland Higher Education Institutional Research Network – conference HEIR*. <https://www.academia.edu/download/73631247/msm-wp2012-06.pdf>

談義本に見られるオノマトペ — 『当世下手談義』『根南志具佐』『風流志道軒伝』を含む七作品を対象に—

中里 理子

A Study of Onomatopoeia in Dangibon ; Focus on Seven Works, including
“Imayou-Hetadangi”, “Nenashigusa” and “Furyu-Shidokenden”.

Michiko NAKAZATO

【要 旨】

『田舎荘子』『当世下手談義』『根南志具佐』『根無草後編』『風流志道軒伝』『当世穴さがし』『成仙玉一口玄談』の七作品を対象に談義本に見られるオノマトペの特徴をまとめ、滑稽本との違いや関連を考察した。漢文訓読調を基本とするため和語のオノマトペは少ないが、漢語のオノマトペは滑稽本よりも多く見られた。漢文訓読的な固い文体の中に俗語的なオノマトペを用い、一般的な擬古文体では適宜和語のオノマトペを用いて滑稽味を醸し出している。格調高い場面や芝居風に描写する際は軍記物語に多用された古いオノマトペを用いるが、セリフには当時の会話のオノマトペを用いて新鮮味を出し、教訓臭をなくして身近な印象を与えている。滑稽本とは異なり、談義本では人物の心情や情景描写を慣用的な漢語で表す例が見られる。セリフに当代語を入れる点、芝居めいた人物描写がある点、俗語のオノマトペを用いることで生まれる面白み、擬音語を効果的に用いることで生まれる臨場感等が滑稽本のオノマトペに関連すると思われる。

【キーワード】 擬音語 擬態語 和語 漢語 滑稽本

はじめに

江戸後期の滑稽本は庶民の笑いの文学であり、オノマトペの出現率も高い。その滑稽本の先駆けとなっているのが談義本である。『日本古典文学大辞典』の「滑稽本」の項には「もともと広義には、談義本全体を滑稽本に含める。この場合、談義本は「前期滑稽本」ともいう」と書かれている^{注1}。筆者は既に滑稽本8作品に見られるオノマトペを調査し^{注2}、個々の作品の特徴及び滑稽本というジャンルのオノマトペの特徴をまとめているが、滑稽本のオノマトペには「前期滑稽本」である談義本の影響はあるのか、談義本の特徴と関連するのかなどについて見ていく必要がある。そこで本稿では、談義本を対象にオノマトペを調査し、作品ごとの特徴を見るとともに談義本全体に共通するオノマトペの特徴について考えていく。

談義本について、濱田啓介（2019）には次のように解説されている。

談義とは本来、僧が聴衆に仏教の教えを講舌することである。談義僧によって弁舌上の工夫が為され、興味を惹くように面白く語られ、口話の芸としての一面を持つようになっていた。その弁舌スタイルを採用して、本来の仏教以外のものに適用して論述した作品が談義本である。談義本が文学史的意義を有するのは、それらが本来の談義のパロディとしての笑いの文学へと展開したためである。（683頁）

同書では、近世の談義本というジャンルは『当世下手談義』に始まり^{註3}、「笑いの文学」である滑稽本に展開していくことが述べられている。本稿では、談義本の代表作とされる『当世下手談義』と平賀源内の『根南志具佐』『根無草後編』『風流志道軒伝』を中心に、作品中にある程度の数のオノマトベが見られる『当世穴さがし』『成仙玉一口玄談』と、「広義の談義本の初発」^{註4}とされる『田舎荘子』のオノマトベを取り上げる。『当世下手談義』『当世穴さがし』『成仙玉一口玄談』『田舎荘子』は新日本古典文学大系本（新字新仮名遣い）、『根南志具佐』『根無草後編』『風流志道軒傳』は日本古典文学大系本（旧字旧仮名遣い）を調査した^{註5}。なお、国書データベースではここで取り上げる七作品すべてが「滑稽本」に分類されている^{註6}。

滑稽本のオノマトベ調査と同じく、擬音語・擬態語に分けて特徴を整理する。また、談義本には漢語系オノマトベが多く見られるため、従来の和語系オノマトベと「滔々」のような漢語由来のオノマトベの両方を扱う。抽出に当たっては、和語については近世語も収録している『日本語オノマトベ辞典』を参考に、『古語大辞典』等によって個別に判断する。「びんしゃん」（＝跳ね返り娘のこと）のような名詞形は取らない。複合語の場合は「ふう／＼者」（＝ならず者のこと）のように固定化した語句は扱わないが、「すた／＼走り」のようにオノマトベの意味が残っている語は取り上げた。抽出の際は、「ふと」「さつと」のように1拍・2拍のオノマトベは後接する助詞「と」までを記す。繰り返し記号は便宜上「／＼」と表記する。漢語系の語は金田一春彦（1978）で分類されているもののうち、「漢字一字のもの」「漢字二字のもの」^{註7}を抽出した。

談義本にはト書き部分がないため、地の文とセリフに分けて調査し、用例がある場合は序や跋文も加えてオノマトベを整理する。まず1727年に刊行された『田舎荘子』のオノマトベを整理し、以下、刊行年順に見ていく。

1 『田舎荘子』

1.1 『田舎荘子』の内容

本作は享保12年（1727年）刊、作者は佚斎樗山である。新古典文学大系に掲載されている四巻四冊を調査した。新日本古典文学大系の解説によると、「荘子」に寓言の方法を借りたもので、「雀と蝶、鷹と木菟等々、対話による思想の伝達」という方法を取り、「以後展開す

る談義本の性格づけを果たした」という²⁸⁸。寓意を用いる手法と、思想という内容面で「莊子」の影響があるのだが、本稿では莊子の思想とは切り離してオノマトペの特徴を探る。

1.2 『田舎莊子』のオノマトペ

本作に見られたオノマトペは以下のようになる。自序には1例もなく跋文は漢文のため取り上げない。延べ語数の後に括弧書きで異なり語数を示す。擬音語と擬態語に分け、漢語系オノマトペは「漢語」として別に示す（以下同じ）。漢語系オノマトペはどの作品もすべて擬態語であった。

地の文 擬音語：2（2） 擬態語：2（2） 漢語：1（1）
セリフ 擬音語：1（1） 擬態語：8（8） 漢語：13（8）

『田舎莊子』には全27語のオノマトペが用いられている。27語のオノマトペを地の文とセリフ部分に分けて整理した。擬音語の場合、（ ）内にはオノマトペが表すものを簡単に示した。擬態語の場合は係る語を示したが、本文に書かれていない例は「φ」とし、内容を簡単に説明した（以下、同じ）。読み仮名がある場合は〔 〕で示す。

<地の文>

擬音語：きち／＼（鼠の声） ぎや／＼（カラスの声）
擬態語：のろ／＼（ゆく） はき／＼（φ＝猫の様子）
漢語： ゆふ／＼（竹笛の音色）

<セリフ>

擬音語：て、つほ、う（鳩の声）
擬態語：蠢〔うご〕々（ある＝菜虫の様子） うろ／＼（φ＝ミミズクの様子） きよろ／＼（目づかひ） 昏々朦々〔くらしくらし〕（食を費やす） こそ／＼（飛でゆく） そつと（あをのけになる） 如鷺〔によろ〕／＼（φ＝ウナギの様子） ばた／＼（うろつく）
漢語： 鬱々（愁をいだく） 役々（生涯をくるしむ） 快然（胸懐） 忸怩（φ＝心情） 惺々悽々（φ＝心） 戚々（事あり） 潭然³（φ＝心・無事なり²） 悠々³（無に帰す・造化の中に遊ぶ・生涯を終る）／ゆふ／＼（興を催す）

地の文よりセリフのほうにオノマトペが多く見られる。前項で触れたように「対話」によって話が進められ、地の文よりもセリフの部分が多いためである。擬音語は動物（鼠・鳥・鳩）の鳴き声が見られるだけである。擬態語は対話に出て来る動物たちの動きを表している。

特筆すべきは漢語の多さである。セリフも地の文と同様に漢文訓読の文体で書かれているため、セリフに多く見られる。なお、和語に含めた「昏々朦々〔くらしくらし〕」は、元は

漢語のオノマトペであるが、意味を当てた振り仮名が疊語形式になっているのでオノマトペらしさを表すものとして和語の擬態語に数えた。

漢語を見ると、「鬱々」のような疊語形式が最も多く、「快然」や「忸怩」のような語形式もある。以下にいくつか漢語の例を挙げる。

- (1) 形やぶれ、足おれて、見るに心戚々たる事あり。
- (2) 天下の至樂を得て、悠々として太虚の無に帰す。
- (3) 心気和平にして、物なく、潭然として、常ならば、変に応ること自在なるべし。

上記の例に見るように、漢文訓読文体に漢語のオノマトペを用いるのは違和感がない。一方、次の例(4)(5)のように和語のオノマトペも少数例だが見られる。

- (4) 少戸をあけ、彼猫を入れければ、鼠すくみて、動かず。猫何の事もなく、のろ／＼とゆき、引くわへて来りけり
- (5) 万一黏にかゝりても、少しもさわがず、身をすくめて、そつとあをのけになりて、ぶらさがり居れば、はごは上に残り、身ばかり下に落る時、こそ／＼と飛でゆく也。

例(4)は漢文訓読調の部分だが、俗語である和語のオノマトペを用いることでおかしみが醸し出される。例(5)はセリフの一部だが、和語のオノマトペを用いることで漢文訓読調の固い調子がやわらぎ、内容がわかりやすく伝わってくる。談義本において、庶民に教化内容を伝えやすくする工夫の一つであろう。

2 『当世下手談義』

2.1 『当世下手談義』の内容

本作は、江戸中期(1752年)、静観房好阿によって書かれた五卷五冊の談義本である。『日本古典文学大辞典』には「好阿は大阪の談義僧であるが、たまたま江戸に来て江戸の町人風俗を見聞し、教訓的意図でこの小説を著した」とある。『日本語大辞典』には、「江戸の町人風俗を扱った最初の小説で、全編教訓臭が著しいものの、江戸小説の先駆的作品として特筆される」と解説されている。新日本古典文学大系本の解説(106頁)に「狭義の談義本の口火を切ったのが本書である」と書かれている²⁹⁾ように、狭義の談義本の嚆矢とされる本作は、前節の『田舎荘子』と比べてよりわかりやすく面白く書かれている。文体は『田舎荘子』が漢文訓読文体で固い印象だったのに対して、以下の例(6)に示すように擬古文体で読みやすい。

- (6) 追はぎではなさそふなが若新刃でもためすとて、引込はせぬかと、気の付程怖さいや

まして、足もひよろつき、齒の根もあわず、わな／＼ふるひて、尻込すれば、

文体の違いや「江戸の町人風俗」の描写がオノマトペ使用にも現れていることを念頭に、本作のオノマトペを見ていく。

2.2 『当世下手談義』のオノマトペ

『当世下手談義』には全68語のオノマトペが見られた。前項の『田舎荘子』が新体系本で約62頁、27語であったのに対し、本作は新体系本で約73頁、68語である。『田舎荘子』よりもオノマトペの出現率が高いことがわかるが、一方で漢語は『田舎荘子』よりも少ない。本作に見られたオノマトペを前節と同様に以下に示す。内容がわかりにくいものには説明を加えてある。本作の序は漢文ではなく訓読文体で書かれていたため、オノマトペの調査に含めた^{注10}。

序	擬音語：1 (1)	擬態語：1 (1)	漢語：0
地の文	擬音語：2 (2)	擬態語：28 (25)	漢語：5 (5)
セリフ	擬音語：1 (1)	擬態語：28 (25)	漢語：2 (2)

<序>

擬音語：チンチン (磬) ^{注11}

擬態語：むく／＼和 [やわ] 〱 (φ = 文体)

<地の文>

擬音語：から／＼ (高木履を鳴らす) どうど (ふす)

擬態語：うそ／＼ (歩く) 急度 [きつと] (おもひ出す=すぐへの意) さつぱり (口上)

しほ／＼ (出る) ずつく (立つ) ぞつと (する) そろ／＼ 2 (出かける・火を消す)

そろり (忍び寄る) つく／＼ (身を怨む) つつくり (居る) とろ／＼ (する=居

眠り) だろ／＼ (八人連れが這入る) ぬつと (這入る) ばつと (消える) はら

／＼ (涙をこぼす) ばら／＼ (皆が起きる) びつくり 2 (φ 2) ふつ／＼ (やめ

る) ぶら／＼ 2 (歩く・φ) べつたり (やる=平身低頭) ほく／＼ (うなづく)

まんぢり (とせず) むく／＼ (起きる) もぢ／＼ (する=手) わな／＼ (ふるふ)

漢語：いんぎん (出立) 蕭索 (高秋) しん／＼ (とする) 凄然 (φ = 高秋) 徒然 (昼)

<セリフ>

擬音語：似我 [じが] 〱 (似我蜂が鳴く)

擬態語：きつと (した=人物のこと) 〱 厳 [きつ] と (して=男の様子) 急度 (心を翻す

=すぐへの意) きよろ／＼ (する) きよろり (居る) きりりしやん (=土佐節の様

子) ごろ／＼ (言わず) しかと (得心せず) ぞろ／＼ (来る) たら／＼ (大口)

たんど (ない) 〱 たんと (くれる) ちや／＼ 〱 ちやわ／＼ (言ふ)

ちよほ／＼（とした筋） とつく（聞く） ひしと（雑説が止む） ぴんと（はねる）
ぶう／＼（言ふ） ふつと2（用いない・切る） ふつ／＼4（やめる3・するまい）
ほやり（としたえくぼ） むさと（受け取らぬ） むつくり（とした一中節） 緩々〔ゆるゆる〕（御意得る）

漢語：ゐんぎん（挨拶する） 忙然（居る）

擬音語は擬態語に比べて少ない。擬態語は人物の様子を表す語が多く、事物の描写はほとんどない。浄瑠璃の一種である土佐節や一中節の印象を表す「きりりしやん」「むつくり」が見られるのは、「江戸の町人風俗」を記したという本作らしいオノマトペである。

江戸後期の滑稽本と比べると、古い時代のオノマトペがいくつか見られる。例えば「きつと」は、「五番目の五郎七は、物やわからか。又きつとした所もあり、かた／＼よらず」のように、表情や態度を表す例は滑稽本にも見られるが、「かならず我神託をうたがわず、急度心をひるがへし」のような「すぐに」の意味はほとんど見られず、古い用い方かと思われる。また、「御触ありてぞ、此雑説ひしと止て」「もはやふつ／＼鉦ぶしをやめて、神の教にまかせんと」のような「ひしと」「ふつふつ」は中世軍記物語や説話に見られた擬態語である^{註12}。擬音語に分類した「どうど」も軍記物語に多用されたオノマトペで、本作では「大木のたほるゝごとく、どうどふして」と用いられている。

文章語的な擬態語が多いことも指摘できる。「酒の毒じやといふ事を、しかと得心せぬから」の「しかと」、「心静に、とつくと聞てたも」の「とつく（と）」はいずれもセリフで用いられているが、中世以降に見られる語であり、江戸期においても武士などの使う畏まった言葉であった^{註13}。江戸後期の滑稽本のセリフでは「しつかり」「とつくり」という〈AツBリ〉型の語形式で多用されており、江戸中期の談義本との違いが見られる。滑稽本では心情や感覚を表すオノマトペが多く見られたが、本作には「ぞつと」「びつくり」の2語が見られる程度である。

古いオノマトペが見られる一方で、「ほく／＼點頭〔うなづき〕て」「一人つつくりとして居れば」「ほやりとした醫〔ゑくぼ〕」「きよろりと、狐つきの退たやうに」等、当時の会話で見られるような俗語のオノマトペを適宜用いて、読みやすさと面白みを加えている。

先の『田舎荘子』が漢文訓読文体であることと関わって漢語系オノマトペが多く見られたのに対して、本作は擬古文体であるためか漢語系オノマトペの数は少ない。特に『田舎荘子』で多く見られた疊語形式の漢語（「鬱々」「役々」等）は少なく、「しん／＼とする」の一語しかない。「しん／＼」は「森々」「深々」のような漢字表記ではなくひらがな表記されており、和語の意識で用いられていることも考えられる。

3 『根南志具佐』『根無草後編』

3.1 『根南志具佐』『根無草後編』の内容

『根南志具佐』『根無草後編』は平賀源内（風来山人）の作で、国書データベースによると『根南志具佐』は別名が「根南志草」「根奈志具佐」とある。『日本古典文学大辞典』によると^{註14}、『根南志具佐』は五卷五冊、宝暦13年（1763年）に刊行された天竺浪人（平賀源内）による作で、外題は「根無草」であるという。実際の溺死事件を「おもしろく小説化したもの」で、地獄や人間界が描かれ、「奇才源内の独特な文章・描写・洒落・風刺が随所に発揮されていて、談義本としては画期的な小説であった」と解説されている。また、「この書的好评に乘じ、源内は明和六年（1769）一月『根無草後編』五卷五冊を著したが、これも市川雷蔵・坂東薪水の詩をヒントにした地獄物である」と書かれている。源内の文章について同辞典「平賀源内」の項に「文章も奔放・奇警、後世に「平賀ぶり」^{註15}の名を残した」と評価されている。本稿では、「平賀ぶり」に触れることはできないが、談義本において源内が用いたオノマトベについて見ていく。前後の談義本と比べながら、両作品のオノマトベを整理したい。

3.2.1 『根南志具佐』のオノマトベ

『根南志具佐』には全45語のオノマトベが見られた。先に見た2作品とは本が異なるために単純には比較できないが、日本古典文学大系本（旧大系本）で約50頁、45語であり、『田舎荘子』よりもオノマトベの使用数が多いことがわかる。本作に見られたオノマトベを前項と同様に以下に示す。自序にはオノマトベが見られず、地の文とセリフを整理した。

地の文 擬音語：3（3） 擬態語：29（22） 漢語：5（4）

セリフ 擬音語：2（2） 擬態語：6（6） 漢語：0

<地の文>

擬音語：くわた／＼（拍子木） ざんぶり（水中に飛び入る） どや／＼（立ち帰る）
擬態語：ころ／＼（こけ出づ） さつと2（御簾がおりる・幕を開ける） しづ／＼2（立ち出づ2） しつぱり（として=客の様子） しどろ（目の内=取り乱した様子） しほ／＼（として） ぞつと（寒けだつ） そよと2（風が吹く2） そよ／＼（扇の風）
そろ／＼（せり出す） 丁〔ちやう〕と（盃を受ける） つか／＼（立ち寄る） つく／＼（申す） つゝと2（出づ・盃を干す） どや／＼もや／＼（木戸口=大勢の人） につと2（笑ふ・笑む） はつと（感ずる） ぱつと（水煙が立つ） はら／＼2（涙を流す2） ぴんと2（する=女の形容） ほつと（溜息をつく） むづと（だく）
漢語：ふん／＼（φ=化粧品店） 茫然（もぬけのごとく） 漫々（蒼海） ゆう／＼2（鯨立ち出づ・めりやす舟）

<セリフ>

擬音語：ぐわら／＼（皿鉢） めり／＼（格子の破れる音）

擬態語：ぐにや／＼（折れる） そろ／＼（干べりする） つく／＼（按ずる） につこ（笑ふ） ぴんしやん（はねる） ゆくら／＼（天雲）

本作では地の文にオノマトペが多く、セリフには少ない。擬音語は擬態語に比べて少なく、「拍子木俄にくわた／＼、大薩摩尊浄瑠璃をかたり給へば」のように芝居めいた場面や、「組んずこけつの人くんじゆ。格子はめり／＼、皿鉢はぐわら／＼」と騒動の様子を語って聞かせる場面等で用いられている。擬態語は、「さつと」「ちやうと」「つゝと」「につこ」「むづと」など軍記物語などに見られた古いオノマトペが多く用いられている点特徴的である。「つか／＼」「しづ／＼」など人物の動きを芝居風に表すオノマトペが用いられる点も指摘しておきたい。また「ゆくら／＼」など万葉集に見られる雅文調のオノマトペも見られる。その一方で「ぴんと」「ぴんしやん」といった江戸期らしいオノマトペが見られる。以下に当代風オノマトペの例を挙げる。

(7) したゝるくてぴんとするものは、色有の女妓と見へ、ぴんとしてしたゝるきものは、長局の女中と知る。

(8) 「年罷（り）寄（つ）たれども、酒はそこぬけ、ぴんしやんとはねる所が、當世のひんぬきなりとて、

例（7）「ぴんと」は頭注に「袖を引くとはねつけるさま」、例（7）「ぴんしやん」は頭注に「細木が有って立廻ることにたとえた」とあるが、両語とも江戸時代になって多くの用例の見られる語である。例（8）にある「當世のひんぬきなり」は、頭注によれば「當世」は「現代。当時の流行語」で「ひんぬき」は「生粋。典型的なもの」であり、当時の流行り言葉を使って話す場面であることがわかる。源内は、古めかしい表現や雅俗取り交ぜた言葉を自在に操っており、オノマトペにもその特徴が窺われる。たとえば、笑いの描写に「につと」「につこ」の二つが用いられているが、「跡から来る女連、己が事かと心得てにつと笑（ふ）もおかし」とくだけた調子で描写するのに対して、「御氣遣あられなど、聞（い）てにつこと打（ち）笑ひ、此世を去せ給ひしを」と重々しい人物像と見合った使い方をしており、オノマトペを使い分けている。

なお、漢語は地の文だけに見られる。「南は蒼海漫々として」という軍記物語によく見られた慣用的な使い方が見られる以外は、「五十嵐（＝化粧品店：引用者注）のふん／＼たるは、かば焼の匂ひにおさる」「只茫然と空蟬のもぬけのごとくに」「めりやす舟のゆう／＼たる、さわぎ舟の拍子に乗（つ）て、船頭もさつさおせ／＼と艫をはやめ」のように、漢文訓読調でなく当時の一般的な擬古文的文章の中で用いられている。平仮名表記もされており、

漢語の意識の薄い用いられた方と思われる。

3.2.2 『根無草後編』のオノマトペ

『根無草後編』には、43語のオノマトペが見られた。『根南志具佐』も『根無草後編』も五卷五冊、旧体系本で『根南志具佐』が約50頁、『根無草後編』は約52頁でほぼ分量は同じであり、オノマトペの出現率もほぼ同じである。本作に見られたオノマトペを前項と同様に以下に示す。

序・跋	擬音語：0	擬態語：1 (1)	漢語：1 (1)
地の文	擬音語：1 (1)	擬態語：15 (13)	漢語：3 (3)
セリフ	擬音語：1 (1)	擬態語：19 (15)	漢語：4 (4)

<序・跋>

擬音語：—

擬態語：のらりくらり (遊の道)

漢語：叟々 [けう／＼] (身)

<地の文>

擬音語：ちやん／＼ (鉦を打鳴らす)

擬態語：ぐつと (額をぬき上げる) しみ／＼ 2 (明け暮れ・泣く) すた／＼ (走る)
ずつと 2 (出づ) すつく (立つ) すや／＼ (寝入る) すんと (梅の若枝) そよ
／＼風 つく／＼ (聞く) ぬらりくらり (φ) ねそ／＼ (φ) はつた (にらむ)
むしやらくしやら (大明神)

漢語：莞尔 [くわんじ] (いふ) 忽然 (顕る) ほう然 (床の内)

<セリフ>

擬音語：チヨン (φ = 終わりの合図)

擬態語：うか／＼ (聞いていられぬ) かつぱ (臥す) ぐわた／＼ (鳴る) ぐひはづし
ぐつと (こまる) こつそり (逢ふ) しつぱり 3 (雪・濡れ事・酒) ずい逃げ／ずい
流し ちら／＼ (雪が落ちる) つく／＼ (見とれる) てら／＼ (輝く) とんと 2
(呑み込めぬ 2) ぴつかり (ひかる) ぶらりしやらり (頭) 髭むしや

漢語：峨々 (高し) 叟々 (月照る) 青々 (草萌出づ) 翩翩 (翻る)

『根南志具佐』と比べて、地の文もセリフも同程度のオノマトペが見られる。擬音語はどちらも少ないが、セリフの1例は「推量違ひの丁、打て置チヨン」という語呂合わせの一部で、拍子木を鳴らす終わりの合図を口真似したものである。地の文の「ちやん／＼」は一の巻の終わりに鉦を鳴らしながら行く様子を表しており、どちらの例も芝居の真似事のようなものである。滑稽本には芝居の趣向や道具立てが多く見られ、拍子木や鳴り物のオノマトペも多い

が、源内の作品にもその例が見られる。江戸期は芝居の影響が大きかったことが窺える。

前項と同様に、「かつぱと臥す」「懐手してずつと出（で）」「焰魔王をはつたと白眼〔にらみ〕」のように軍記物語（あるいは当時の芝居）に多く見られる古いオノマトペがいくつかあるが、前項の作品以上に江戸期に見られる当代のオノマトペが多い。「額をぐつとぬき上げ」の「ぐつと」は、強調表現として江戸末期の滑稽本にも多数見られる語である。東の上はてら／＼と輝き」「押（さ）へる鯁〔なまづ〕のぬらりくらり」「そばからねそ／＼上方の産れと見えて（＝まだるくてねっとりした様：引用者注）」、跋文の「遊魚〔くらげ〕なすのらりくらりの遊の道は」などは当代のオノマトペである。「急脚子と見えてすた／＼走り」は、近松など江戸前期に多用された「ちよこ／＼走り」のアレンジである。また、「尻われのぐつとこまり、ずいにげのぐひはづし」と、調子よく語る場面でオノマトペがテンポよく用いられている。「ずい」は強調語で「ずい流し（頭注に「全く無視すること」とある）」とも用いられており、当時の口頭表現である。「通り者」のセリフに当代の語をテンポよく入れ込み、「かつぱと伏し」と古い語を用いる宗匠の重々しい語り口と対照的に描かれている。

漢語は序、地の文、セリフにそれぞれ少数見られる。前項では一般的な文章の中で用いられていたが、本作では「其時大師莞尔〔くわんじ〕として曰（く）」「積物峨々として山よりも高く、張札翩翩として雪のごとく翻る」のように漢語訓読文の文体で用いられている。

4 『風流志道軒伝』

4.1 『風流志道軒伝』の内容

『日本古典文学大辞典』によると^{註16}、五卷五冊で風来山人（平賀源内）作、1763年に『根南志具佐』と同時に出版されたという。実在した談義僧「深井志道軒」に心酔した源内が「その伝に託して自己の世界観を述べたもの」であるという。梗概をまとめると、浅草観音の靈験によって生まれた志道軒（浅野進）は、風来仙人から飛行自在で隠れ具となる羽扇を授かり、「世界の人情を知って滑稽をもって人を寄せ、卑近なたとえをとって俗人を導け」と教えられ、日本全国を周った後に外国（大人国、小人国、長脚国、長擘国、穿胸国）を巡り、さらに「うてんつ国・きやん国」等々を廻って朝鮮を経て中国に渡った後、日本に戻って談義僧になる、という壮大な内容である。同辞典には、「源内の博識・表現力・描写・風刺・世界観が縦横に生かされた作品」で、「その後の談義本に遍歴小説の流行をうながした」と解説されている。野田寿雄（1961）は、源内の著作（『根無草』『風流志道軒伝』）について、「従来の談義本の諸作品とはかなり毛色が異なっている」「教訓ということが二の次になって、かなり構成のおもしろさが前面に出てきている」と述べ、「滑稽が主眼になって少なくとも談義本の本質を失っている」が、しかしそれは「小説的發展であったと考えることができる」と述べている。本作は教訓臭が少ない点、おもしろさが前面に出ている点で、オノマトペの使い方にも特徴が表れているのではないかと考えられる。

4.2 『風流志道軒伝』のオノマトペ

本作には47語のオノマトペが見られた。旧大系本で約63頁あり、前節の源内の作品と比べるとオノマトペの出現率は僅かに低い。本作に見られたオノマトペは以下のようになる。自序、及び跋文の前の五巻末尾（大尾の後の歌）にオノマトペが見られたため加えた。

序・末 擬音語：2 擬態語：0
地の文 擬音語：6（6） 擬態語：22（20） 漢語：11（7）
セリフ 擬音語：1（1） 擬態語：5（5） 漢語：1（1）

<序・末尾>

擬音語：ぎやつと（産声） とゝんとんとん（太鼓）

擬態語：—

<地の文>

擬音語：こつ／＼（咳が出る） 丁ど（切り落とす） トン／＼／＼／＼、トントン／＼
（机を叩く） ぱつと（羽扇をあをぐ） 兵〔ひやう〕と（はなつ） ほろゝ打（ち）

擬態語：うつとり（居る） うろ／＼（見廻す） ぐるり（廻る） くわつと（灯が照渡る）
こそ／＼（寝に来る） こつぱり（φ＝愛敬） しづ／＼（立ち出づ） すく／＼（大きくなる）
すつく（立ちあがる） そろ／＼（φ＝大学を素読させる） ちよこ／＼走り
つか／＼（馳寄る） つく／＼3（思ふ・思ひめぐらす・観じる） づらり（居並ぶ）
とろ／＼（まどろむ） とろり／＼（ねばる） ぴこ／＼（尾を揺らす） ふと（目覚す）
ふらり／＼（居眠り） ゆらり／＼（大船）

漢語：慙慙（詞） 赫灼（光明がかゝやく） 忽然2（あらはれる2） 翩翻（羽織がひるがへる）
忙然4（ながむ・座す・φ2＝過ごす・様子） 漫々（蒼海） ゆう／＼（吹きすさむ）

<セリフ>

擬音語：テレツクスツテンテン、とんと（太鼓）

擬態語：うか／＼（歩く） すつぱり（着せる） つく／＼（思ひめぐらす） ぬつぺり
（面貌） ぬらりくらり（世を渡る）

漢語：豁然（覚める）

擬音語は、前節の『根無草後編』よりは何種類かの音声が表示されているが、臨場感のある音声はほとんどない。太鼓は話の終わりの合図の音として用いられ、「こつ／＼と咳の出るを相図にして」「我また産（れ）た時、ぎやつと云（ふ）からのたはけなれば」と、一般的な音声の説明として用いられており、その場の音声を表現しているのではない。「丁ど」「兵と」は軍記物語に多用された語だが、「丁ど」は茨木童子と渡辺綱を引き合いに出して「懐釵をぬきはなち、腕を丁ど切（り）落（と）せば」と用い、「兵と」は「那須の与市に見せ

たれば、日の丸かと心得て、よつびき兵〔ひやう〕とはなつべき」と平家物語を想起して用いている。前時代の話題の場面では古いオノマトペを用いているようである。

擬態語は地の文に多く見られるが、セリフも地の文も当代のオノマトペが用いられている。「こつぱり」「すつぱり」「ぬつぱり」など〈AツBリ〉型の語や「づらり」「とろり／＼」「ふらり／＼」「ゆらり／＼」など〈ABリ〉型及びその重複形の語は軍記物語には多用されていない語形である。特に〈AツBリ〉型は鈴木雅子（2007）に「この型は近世にもっとも優勢で」と指摘されており、本作に見られる〈AツBリ〉型も当代のオノマトペと考えられる。

前節の源内の作品にも当てはまるが、オノマトペを多用した文体ではない。ただ、雅文調の中に俗語のオノマトペを用いて、雅俗混淆の面白みがある。以下に、「汝能我（が）言を信ず」と固い口調で語り出す仙人のセリフからオノマトペの例を挙げる。

- (9) 鰻鱺・泥鰌と同じ様に、ぬらりくらりと世を渡（り）つゝ、つら／＼世上を窺ふに、平家西海に沈て後、上下太平の化をほこり、賢者あれども登庸〔あげもちゆる〕ことを知らず、
- (10) ぬつぱりとして和な讒諂面諛の者にあらざれば、左右に近付（く）ことなく、種々のおごり日々に長じ、内證はいすかの贅、悔て返ぬ家老・用心、

漢文訓読調を基とする仙人の堅苦しい口調に当代の新しいオノマトペを交えて、重々しい口調でありながら滑稽味を加えている。俗語であるオノマトペを用いて、雅俗混淆の面白い文体となっている。

漢語は先に見た二作品よりも多く見られるが、「蒼海漫々として」「光明赫灼とか、やき」「忽然とあらはれて」のように慣用的な漢語の用い方が多い。

5 『当世穴さがし』

5.1 『当世穴さがし』の内容

本作は穎斎主人の作で明和6年（1769年）刊行（後編は1771年）、前・後編とも五巻（計十冊）である。新日本古典文学大系本の解説（182頁）によると、本作の内容は「業平の霊夢に自由自在の身を得た豆男が、当時市中の流行風俗をとりあげてその行き過ぎや至らぬ所を批判するというもの」である。「占い師、三味線その他の鳴物」などを取り上げ、「何れも当時流行の真っ盛りを示して、その当代性の濃さは、この一篇で江戸の市民生活をかなりの細部にわたって十分にのぞき見出来る程である」という。オノマトペにも江戸の市民生活に関わる語が見られるのではないかと思われる。

5.2 『当世穴さがし』のオノマトペ

本作に見られたオノマトペは全34語で他の作品と比べて少ない。自序にはオノマトペが見られなかった。以下に用例数とオノマトペをまとめた。

地の文 擬音語：1 (1) 擬態語：8 (7) 漢語：0

セリフ 擬音語：2 (2) 擬態語：22 (19) 漢語：1

<地の文>

擬音語：かう／＼ (カラス)

擬態語：くる／＼ (縄をまく) とんと (忘れる) にこ／＼² (したくす・笑ふ) びしよぬれ ひよこ／＼ (出かける) ぶらりしやらり (亀が頭を動かす) はや／＼^{註17} (= 人々が騒ぐ様子)

<セリフ>

擬音語：すとん／＼ (三味線の糸を鳴らす) べろん／＼ (琵琶)

擬態語：うか／＼ (する) 急度 (篆書=きりりとした様子) /きつと (したはい席) ぐいやり ぐつと (わるくなる) ぐす／＼ (抜く=わざと的外す) ぐる／＼まき² こそ／＼ (しまふ) しつぱり物 (=人の様子) すきと (知らぬ) すふ／＼ (質におく) ずんど² (上古の事・後の事) そろ／＼ (名じみを返す) ぞろ／＼ (けいこを引く=大勢が辞める) ちら／＼ (みせる) とんと (ご無用) ぬつと (顔を持ち上げる) ひよつと (見込みがちがふと) ふさ／＼ (φ=たくさん) ぶらり (隙過ぐ) むさと (歩かれぬ)

漢語：ほう／＼ (ひげ)

擬音語は、「江戸の市民生活」を細部にわたって描いたとあるように、当時の市民が楽しんでいた三味線の音「すとん／＼」や琵琶の音「べろん／＼」が表現され、市中にいるカラスの鳴き声「かう／＼」も描かれている。擬態語の「しつぱり物」はここでは人物の様子を表しているが、「しつぱり」が三味線の音色を表す例が多いことが関連していると思われる。

擬態語は、「ぐいやり」「ぐつと」「ぐす／＼抜く」「すふ／＼」など当時のくだけた話し言葉と思われる語がいくつか見られる。「ぐいやり」は脚注に「どンドン進めること。「ぐい」は当時の通言で、物ごとを過重に表現する時に用いる」とある。「ぐい」「ぐつと」は『根無草後編』にも見られたが、当時の庶民の話し言葉で威勢よく強調する表現であったと思われる。「ぐす／＼抜く」は揚弓の競技会の話をする場面で「向ふの巧者がぐす／＼ぬいて、「貴様の的わりはちと大きい」とそやし立」と用いられ、脚注には「未詳。わざと的外すことか」とある。「ぐす／＼」というオノマトペは他では見られなかった語だが、当時の話し言葉で使われた語と推測できる。「すふ／＼」は「住持の大屋へふり込れたときは、三両か四

両が、すふ／＼質におかれて、流れるときは」と用いられており、滑らかに物事が進む様子を表す「すうすう」^{註18}であると思われる。セリフに当時のくだけた話し言葉を用い、親しんで読める工夫をしているのであろう。

漢語は「ひげぼう／＼」の一語しか見られない。ひらがな表記されていることもあり、漢語としての意識がなく、平易な表現として用いられているように見える。

6 『成仙玉一口玄談』

6.1 『成仙玉一口玄談』の内容

本作は大江文坡の作で五卷五冊、天明5年（1785年）に刊行された。先に見た『風流志道軒伝』の影響を受けた「遍歴小説」の類である。大系本の解説（250頁）に以下のように書かれている。

三保の裏の漁師良助は、実はやたらと女好きの遊び人で、天上の遊廓の全盛三五太夫をまんまと女房にしたのも束の間、雷の五郎助にみつかって奪いかえされ、忘れていった羽衣を着て三五を追いかけた良助は東風に吹きとばされ、遙か南アメリカはハラシリア（ブラジル）へ。そこで和莊兵衛に出会い、白銀の流れる大河（ラブラタ河）を見物する……。

内容について、同書の解説では「内容は極めて傾向性の強いものなのだが、叙述のたくみさ、趣向だての奇抜さで読者を強引に引きずり込む筆力（250頁）」と評されており、巻末の「談義本略史」には「一きわ異色の作品（407頁）」とある。「源内ともまた一味違う筆力（407頁）」と称される作者のオノマトベ使用をまとめたい。

6.2 『成仙玉一口玄談』のオノマトベ

本作に見られたオノマトベは41語であった。自序が漢文のため、地の文とセリフからオノマトベを抽出した。以下に用例数とオノマトベをまとめた。

地の文	擬音語：3（3）	擬態語：12（12）	漢語：4（4）
セリフ	擬音語：0	擬態語：15（12）	漢語：7（6）

<地の文>

擬音語：ごろ／＼ごろ（雷） どう／＼どう（暴風） ぱち／＼ぱち（雷が落ちた音）

擬態語：かつぱ（打臥す） きつと（見渡す） こて／＼（器に盛る） ころり（=寝る）

颯〔さつ〕と（吹来る=暴風） しほ／＼（する=涙で簪が） 推乱離〔すらり〕／＼（行く） 莞爾〔につこ〕（笑ふ） 恟り（する） 閃々〔ひら／＼〕（吹きまかれる） 浮波〔ふうわ〕／＼（飛ぶ） むつく（起きる）

漢語：忽然（舞い下る） 茫然（あきれ居る） 默然〔もくねん〕（聞居る） 楽々（暮す）

<セリフ>

擬音語：一

擬態語：うか／＼（やっでのける）　うち／＼（φ）　うつかり（出す）　ぐつと（云分のある）　しよろ／＼流れ（小さな川）　寸段〔ずた〕／＼2（割截〔きり〕たり・する）　ちや／＼（着ろ＝さっさと）　トント（思ひ切る）／＼とんと（ない）　によつと（生れ出る）　びつくり（する）／＼恠り蟲　フト（落ちる）／＼ふと（頭を挙げる）　ゆるり（寝なさい）

漢語：艶々〔ゑい／＼〕（色香芬芳）　赫々2（獅子座・かゝやく）　豁然〔くはくねん〕（大悟す）　忽然（平癒す）　了々（覚知る）　歴然（体あり）

オノマトペの用例数は少ないが、擬音語はこれまでの作品と比べると臨場感があるオノマトペが見られる。雷が鳴って落ちる様子を「ごろ／＼ごろと鳴か電光か時の間に、一天忽ちかき曇り、雷雨しきりに降り車軸し、ぱち／＼ぱちの音と共に、落たは」と活写している。擬態語は他の作品と同様に「かつぱ」「颯と」「莞爾〔につこ〕」のように軍記物語に多用された語もあれば、「閃々〔ひら／＼〕」「浮波〔ふうわ〕／＼」「むつく」のような当代のオノマトペも見られる。表記の面でオノマトペに漢字を宛てる「推乱離〔すらり〕／＼」「閃々〔ひら／＼〕」「浮波〔ふうわ〕／＼」のような当て字表記が見られる点は特徴的である。滑稽本に見られた心情や感覚の表現は談義本にほとんど見られないが、本作は「びつくり／＼恠り」が3例見られる。「びつくり」は他の作品では『当世下手談義』に2例見られただけである。漢語のオノマトペは比較的多く見られるが、「一然」型が多く、和語のオノマトペと同じ語形となる畳語形式は少ない。例を見ると、「忽ち豁然として真一を大悟し」「其色香芬芳艶々として、誠に黄金世界とも称すべし」のように固い漢文訓読文体で用いられている。

本作の文章の基本は漢文訓読調で例(11)のように語られているが、その中に例(12) (13)のような七五調に乗せるような調子のよい文体が混ざり、また、ところどころに「名所旧跡も案内して見せませふ」のような会話も混ざっている。

- (11) 然るに此良助を人異名して箒良と称せしは、此男数多の女を掛想い、密情を通ずといへども、其女と久しく相遇ことを嫌ひ、両三度にして塵芥を箒棄るがごとくす。
- (12) 何と名づくる国やらむと、詠むる中に颯と吹来る暴風、どう／＼どうの音諸ともに、箒良は吹まかれて閃々〔ひら／＼〕と踏止まるにも雲の上、何と為方風に連、
- (13) ヤア箒良どの、何をいふても白川夜舟、労倦も尤も」と押入より蒲団取出し打被せて、我等もさらば御相伴と、ころりと枕ひきよせて、共に夢をや結ぶらん。

硬軟取り混ぜた自在な文体であるが、固い漢文訓読調の部分には和語のオノマトペはほとんど見られず、擬古文調の部分に用いられる傾向にある。

7 談義本のオノマトベ

今回調査した『田舎莊子』『当世下手談義』『根南志具佐』『根無草後編』『風流志道軒伝』『当世穴さがし』『成仙玉一口玄談』の七作品に共通する特徴を簡単にまとめる。

滑稽本と比較すると、作品の分量に比して和語のオノマトベは少ない。文章が漢文訓読調を基本としているためであろう。漢語のオノマトベは滑稽本よりも多く見られ、ほとんどが漢文訓読文体の中で用いられている。「ゆう／＼」「ほう然」「ほう／＼」など多用された一部の漢語は、時にひらがな表記されて日常語として用いられているようである。

漢文訓読的な固い文体の中にも俗語的なオノマトベを用いる場合があり、滑稽味を醸し出しながらわかりやすく伝える工夫が見られる。文章が雅俗・硬軟を取り混ぜた文体特徴を持つ場合には、一般的な擬古文体の部分に俗語である和語のオノマトベが適宜用いられ、面白みが感じられる。重々しい人物を描写したり格調高く芝居風に描写したりする部分には、「しづ／＼と立ち出で」「莞爾〔につこ〕と笑ふ」「はつたと白眼〔にらみ〕」など軍記物語に見られたような古いオノマトベが効果的に用いられる一方で、セリフの部分には「ぐつとこまる」「ぐいやり」「髭むしや」など当時の会話のオノマトベが用いられて新鮮味を出していると思われる。教訓臭をなくして身近な印象を与えていると言える。

人物を描写するオノマトベは少なく、特に滑稽本で多く見られた心情や感覚を表すオノマトベは「ぞつと」「びつくり」が見られる程度である。そのためか、漢語のオノマトベが心情表現として多く見られ、「鬱々として、つねに愁をいだき候」「胸懐をのづから快然として」「茫然として暫時あきれ居たりしが」のように慣用的表現として用いられている。

風景や情景を表す際には、漢語の慣用的表現が多く見られる。「高秋蕭索として倍凄然」「南は蒼海漫々として、雲と海との色もさやかに見へわかず」「草青々と萌出（で）ては、心殊更春めき、月皎々と照（り）ては其俤益々ゆかし」「四季ともに花開、其色香芬芳艶々として」など慣用的な漢語表現を用いており、滑稽本よりも風景や情景描写が多い。

以上にまとめたように、談義本では漢文訓読文体を基本として漢語のオノマトベを慣用的に用いながら、和語のオノマトベについては古い語と新しい語を取り混ぜて滑稽味を醸し出している。セリフに当代語を入れる点、芝居めいた人物の描写がある点、また、俗語のオノマトベを用いることで生まれる面白みや、擬音語を効果的に用いることで生まれる臨場感なども、滑稽本に関連する特徴であると思われる。

おわりに

談義本の中から代表的と思われる七作品を取り上げ、オノマトベ使用の特徴を整理した。滑稽味や親しみやすさを感じさせる文体は、オノマトベの用い方も大きく関係していると考えられる。中野三敏（1990）の「談義本略史」に『風流志道軒伝』と並んで人気となった『和莊兵衛』の記述があり、『成仙玉一口玄談』はこの二作をつきまぜたような作と指摘されている（406～407頁）が、今回、『和莊兵衛』を取り上げることができなかった。同書には、「『風

流志道軒伝」と比べる時、寧ろその教訓臭においては「和莊兵衛」の方が格段に強く」とあり、オノマトペ使用にも特徴が見られたのではないかと思われる。ただ、談義本におけるオノマトペ使用はそれほど多くはないので、談義本の滑稽な味わいから発展した滑稽本のオノマトペを見ることで、江戸期のオノマトペの特徴を整理することができると考えてよいだろう。

【注】

- 1 岩波書店『日本古典文学大辞典 簡約版』「滑稽本」の項（浜田啓介執筆、727頁）。
- 2 『東海道中膝栗毛』『浮世風呂』『浮世床』『四十八癖』『花暦八笑人』『滑稽和合人』『妙竹林話七編人』『魂膽夢輔譚』の八作品である。
- 3 濱田啓介『国文学概論』には、「文学ジャンルとしての談義本は『当世下手談義』において成立する」（683頁）とある。
- 4 新日本古典文学大系81所収の『田舎莊子』解説（2頁、中野三敏校注）による。なお、巻末「談義本略史」によると、作者の樗山は「田舎莊子」以降八部三十七卷三十七冊を刊行し、自ら「外題異なりといへども始終みな一意にして、全体田舎莊子なり」と記しており、「主意・表現の両面にわたる「莊子」の利用」であるという（377～379頁）。
- 5 各作品の底本については、『田舎莊子 当世下手談義 当世穴さがし』（新日本古典文学大系81）所収の「当世下手談義」は東京国立博物館蔵本、『当世穴さがし』と『田舎莊子』は家蔵本、『成仙玉一口玄談』は国立国会図書館蔵本であるという。『風来山人集』（日本古典文学大系55）所収の『根南志具佐』『根無草後編』は宝暦一三年及び明和六年刊の岡本利兵衛刊の初版であるという。新体系本は新字体、旧大系本は旧字体の本となっている。
- 6 国文学研究資料館国書データベース（<https://kokusho.nijl.ac.jp/>）（2024年9月閲覧）。
- 7 『擬音語・擬態語辞典』の12～13頁に分類されている。「漢字一字のもの」は「燦（として）」など、「漢字二字のもの」は（1）「-焉」（2）「-乎」（3）「-爾」（4）「-若」（5）「-如」（6）「-然」（7）「同じ語根を重ねたもの」（例：煌々）（8）同じ子音の拍を重ねたもの（例：恍惚）（9）「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」（例：安閑）に分類されている。「漢字二字のもの」については、日本語で多用されていること、日本語のオノマトペの音感に近いことという点から（6）～（9）を中心に取り上げた。なお、漢語を抜き出す場合は、「＝として」「＝たる」など送り仮名の部分を略した。
- 8 『日本古典文学大辞典』の「佚斎樗山」の項（中野三敏、99頁）には「『莊子』いうところの「寓言・重言・卮言」の三言を駆使した明確な方法意識は、以後の小説界に大きく影響して、談義本を初めとする寓意小説の流れを開く端緒となる」と解説されている。
- 9 解説（106頁）には、「本書の刊行は、いわば江戸出版界の雪解けに比すべく、敢えて言えばベルリンの壁の崩壊にも似ていた」と評され、享保の改革で出版の検閲が厳しい状況を経て本書が刊行許可を得たことにより、「以後の談義本界に質量ともに並ぶ当世風俗描写の洪水を現出させることになった」と解説されている。「教訓・教化が主目的」であった従来の談義本と異なる「当世風俗満載の作品」として重要な位置を占めており、オノマトペの用いられ方も工夫

がされているのではないかと思われる。

- 10 なお、本文中に当代流行りの豊後節の一節があるが、歌謡のため調査から外した。
- 11 「磬〔きん〕」は新日本古典文学大系の注に「談義の始まりに用いる打楽器。曲った医師や玉をつるして打ち鳴らす」(108頁)とある。
- 12 軍記物語のオノマトベについては、拙稿(2012)「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本、覚一本、百二十句本の比較から—」(『上越教育大学研究紀要』第31巻)、拙稿(2013)「太平記の擬音語・擬態語—平家物語との比較を交えて—」(『白百合女子大学研究紀要』49号)、拙稿(2015)「義経記の擬音語・擬態語—「太平記」との比較を中心に—」(『白百合女子大学研究紀要』50号)、拙稿(2015)「『曾我物語』の擬音語・擬態語—諸本の比較から—」(『白百合女子大学研究紀要』51号)等による。説話については拙稿(2016)「『宇治拾遺物語』のオノマトベ」(『白百合女子大学研究紀要』第52号)、拙稿(2017)「中世説話作品に見られるオノマトペ—『古今著聞集』『沙石集』を中心に—」(『佐賀大学教育学部研究論文集』第2集第2号)等による。
- 13 拙稿(2022)「[ABト]型から派生した[AッBリ]型のオノマトペ認定に関する考察・その1—「しかと」「しつかと」「しつかり」の場合—」(『佐賀大学全学教育機構紀要』第10号)、拙稿(2022)「[ABト]型から派生した[AッBリ]型の語のオノマトペ認定に関する考察・その2—「とくと」「とつくと」「とつくり」の場合—」(『佐賀大言語教育』第6号)の調査による。
- 14 『日本古典文学大辞典 簡約版』「根南志具佐」の項(1430~1431頁、野田寿雄執筆)。
- 15 石上敏(1991)では「平賀ぶり」を「源内の多用する事物起源の枉解、羅列形式、野傾論、古典のもじり、芝居仕立て、殊更難解な語句の使用による術学等々」「自在に引用を織り込んだ、リズム第一、流れ優先の文体」と評している。
- 16 『日本古典文学大辞典 簡約版』「風流志道軒伝」の項(1548~1549頁、野田寿雄執筆)。
- 17 本文は「ゆしま天神に参詣せんと、茶屋の前を通れば、何やらはや△△。是は何だと、はいりてみれば、揚弓の惣ぐわい。」とある。おそらく「ワヤワヤ」と読むのであろう。
- 18 『角川古語大辞典』「すうすう(と)」の項に「㊦擬態語。なんの妨げも受けることなく順調に事を進めるさま。支障なく事が進むさま」とある。

【参考文献】

- 石上 敏(1991)「〈平賀ぶり〉遡源—談義本の影響について—」(『岡大文論稿』(岡山大学国語国文学会)19号)
- 穎原退蔵・尾形仵(2008)『江戸時代語辞典』角川学芸出版
- 小野正弘(2007)『日本語オノマトベ辞典』小学館
- 金田一春彦(1978)「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 佐々木治綱(1955)「第四章近世文学 八、談義本」『日本文学新史』塙書房
- 鈴木暢幸(1932)「第四編 江戸中心期の小説」『江戸時代小説史』(教育研究会)
- 鈴木雅子(2007)「解説—歴史の変遷とその広がり」小野正弘編『日本語オノマトベ辞典』小学館
- 中田祝夫監修(1993)『古語大辞典』小学館
- 中野三敏(1981)『戯作研究』中央公論社
- 中野三敏校注(1990)『田舎荘子 当世下手談義 当世穴さがし』(新日本古典文学大系81)岩波書

- 店（巻末に「談義本略史」所収）
- 中村幸彦校注（1981）『風来山人集』（日本古典文学大系55）岩波書店
- 中村幸彦・阪倉篤義・岡見正雄（1982～1999）『角川古語大辞典』角川書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2000～2002）『日本国語大辞典』第二版 小学館
- 日本古典文学大辞典編集委員会（1986）『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店
- 野田寿雄（1961）「談義本について」『近世小説史論考』塙書房
- 濱田啓介（2019）『国文学概論』京都大学学術出版会
- 飛田良文・浅田秀子（2018）『現代擬音語擬態語用法辞典 新装版』東京堂出版

付記：本稿は科学研究費基盤研究（C）（一般）「近世の滑稽本・談義本に見られるオノマトペの記述的研究」（課題番号：22K00589）の研究成果の一部である。

佐賀大学全学教育機構紀要

第13号

2025年3月31日発行

発行者 佐賀大学全学教育機構

〒840-8502 佐賀市本庄町1

電話 (0952) 28-8895

Journal of Organization for General Education Saga University

Volume 13, 2025

Henry James's Narrative Technique in "Louisa Pallant"	Tatsuya NAMOTO	1
Education and Geographical Mobility in Postwar Japan: A New Direction between National and Local Trends	Shiho MURAYAMA	11
The Current State and Future Considerations of the English Minor Course at Saga University in 2024	Brendan VAN DEUSEN	25
A Study of Onomatopoeia in Dangibon ; Focus on Seven Works, including "Imayou-Hetadangi", "Nenashigusa" and "Furyu-Shidokenden".	Michiko NAKAZATO	35